Seven Fantasia 異聞東方戦記

丁・丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｖｅｎ　Ｆａｎｔａｓｉａ　　異聞東方戦記

【Ｎコード】
Ｎ０２３７Ｚ

【作者名】
丁・丁

【あらすじ】
いつかのどこかの幻想郷・・・かつて博麗大結界に生じた綻びから多くの異形が現れ災厄をもたらした。
それらを打ち倒し結界を修復したのは当時の博麗の巫女と一部の妖怪、そして招かれた五人の異邦人達だった。
それから年月は流れ、それが御伽話として語られるようになったころ新たな闇が動き出す。
再び始まる戦いに招かれたのは7人。螺旋の勇者『カミナ』、黄金の英雄『トニー・スターク』、優しきくノ一『忍』、仮面の探偵『

鳴海　荘吉』、鋼の父『三船　敬三』、軍人学生『葉隠　覚悟』、死神執事『ウォルター・C・ドルネーズ』等だった。
幻想郷を包み込もうとする闇に彼らと住民達はどう立ち向かっていくのだろうか・・・。

#.0　プロローグ（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#.0 プロローグ

「まずいわね・・・こんなに早く結界が脆くなるなんて」

博麗大結界の境界で彼女は一人ため息をついていた。

流れるような金髪に派手なドレス、そして大きな傘が印象的な女性だがなんだかとても胡散臭く見える。

「うーん、この調子じゃまた前みたいに外から呼ばないとまずいかもね。幻想郷(ここ)にふさわしくない連中もちらほら入ってきてるみたいだし」

幻想郷の妖怪八雲紫(やくもゆかり)はふと前回の結界修復を思い出した。

あの時も本来は来るはずのない別の時間の世界からさまざまな異形の存在が結界をすり抜けて幻想郷に流れ着いてしまった。異形は結界の機能不全の影響で変質しておりそれらを排除するために当時の巫女と一部の妖怪達、そしてそれらを倒すべく招かれた彼らは戦った。その結果、結界は修復され元に戻り招かれた彼らは帰っていった。

・・・あれがどれくらい前か彼女はもう忘れてしまったが。

「聞こえてるかしら」

紫は一枚の札を取り出しそれに向かって語りかけた。札には漢字のような文字が書き込まれている。

「何かありましたか、紫様」

札から彼女の式神の声が聞こえた。

「やっぱりあなたの報告通り結界の綻びが広がっているようだわ。それでなんだけど、しばらく家を空けるわね。すぐに帰ってくると思うけど結界がらみで何かあった場合はいつも指示してあるように行動しなさい」

「分かりましたが・・・どちらに？」

「昔の知り合いのところよ、面倒くさいのだけれどね。それじゃ～よろしく藍」

「御意」

軽い口調の主人にやれやれといった声色で式神八雲藍（やくもらん）は答えた。

「さて、少しばかり疲れるけどしょうがないわよね。さっさとあの女のとこに行かなきゃ」

そして紫はスキマに消えていった。新たな客人達を招くために・・・。

――――幻想郷にはいくつもの伝承がある。それらは幻想郷縁起に大半が記されているが中にはそうでないものも多々ある。そのひとつに五人の英雄の話があった。

かつて博麗大結界が緩み多くの異形の怪物たちが幻想郷に災厄を

もたらした。
その時、外の世界から来た五人の異邦人と博麗の巫女そして一部の妖怪が怪物たちを打ち倒し平和を取り戻したという。
招かれた五人の異邦人はこう語られている。

一人は髑髏の仮面を被り風の如く駆け抜け、

一人は一つ目の真紅の巨人を操り稲妻の如く戦い、

一人は白髪の侍で素っ頓狂な騒ぎを起こし夜叉の如く暴れまわり、

一人は左腕が銃で蛇の如く異形を狩り、

一人は異界の姫で大剣を軽々と扱い月光の如く輝いていた。

・・・という。

そして、これから始まる物語もいつか伝承として語られるのだろう。七英雄の御伽話として。

#. 0　プロローグ（後書き）

今回はプロローグのみになります。至らない点が多く素人丸出しの書き方ですがなんとか続けていきたいと思います。

#．1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1

気がつけば見知らぬ場所で寝ていた。どうも記憶がはっきりしない。

たしかでかくなったシモンを見送った後、突然何かに吸い込まれてやたら胡散臭い姉ちゃんから何かを頼まれた気がしないでもないような・・・とりあえず地面の上にはいるようだが辺りは霧で何も見えない。

「じー・・・・」

なんかこう腹が重いし冷える気がする。

「じー・・・・・」

視線を感じる気もするがよく分からねえ。てか腹が減ったな。

「じー・・・・・むむむッ！！！」

目が合った。なんか青い服を着たガキと思いっきり目が合った。しかも俺の腹に乗ってやがる。

「だれあんた、あたいは最強のチルノだよ」

間髪いれずに名乗られた。しかも最強だと？こりゃあこっちも名乗らなきゃいけねえだろう。俺は勢いよく立ち上がり見えない空を指差し叫んだ。

「いいか耳かっぽじってよ～く聞きやがれ！螺旋の宇宙（そら）に悪名轟くグレン団！その不屈の鬼リーダーカミナ様たぁ、俺のことよ！！わかったか最強のチ・・チ・・・チロル！！！」

うん、たしかこいつはチロルとかいってたはずだ。間違いない。なんといっても俺の耳は節穴じゃないからな。しかしチロルは顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけている。

「チロルじゃない！最強のチルノ！チ・ル・ノ！！わかったかグロン酸のカミラ！」

グロン酸！カミラ！・・・こいつ、わけのわからんことをいってやがる。たしかに俺も名前を間違ったがこいつほどはひどくない。一文字違うだけだ。

「ぜんぜんわかってねえじゃねえか！グレン団のカミナだ！カ・ミ・ナ！！」

「うるさい！あんたなんかカエルみたいに冷凍してやる！覚悟しろ！」

チルノがそういうと急に辺りが冷えてきた・・・というよりはチルノ自身が冷気を発して辺りが冷えてきている。こいつは一体何者だ？よく見れば背中に透き通った結晶が六本生えてやがる。獣野朗ってわけでもなさそうだが人間でもないようだ。

「なんだとぉ！わけのわからねえことばっかりいってんじゃねえぞ！そっちこそ覚悟しやがれ！」

俺は脇に転がっていたソレを直感的に拾いかまえた。

どういうわけかあの刀があったのだ。ここにあるはずのない刀。しかし今は考えている場合ではない。チルノの周囲はさらに温度が下がっている。見た目はただのガキだが油断はできないようだ。あっちもスイッチが完全に入ちまってるようだし、これは面白くなりそうだ。

互いに少しずつ距離を詰めていく。何かを感じているのかチルノも様子をうかがっているようだ。

おそらく勝負は一瞬、それで決着するはずだ。

刀を握った手に神経を集中させる。

「ヘッ！やるしかないみてえだな！いくぞ！！」

「こい！」

そして両者が一撃を繰り出そうとした刹那、

「ちょっと待った！」

突然誰かの声がした。

「ええと、二人とも落ち着こうよ。ね、チルノちゃんにカミナさん？」

すると霧の中からチルノより背の高い羽が生えた少女があらわれた。

「大ちゃん！」

チルノは今までの状況はどこ吹く風でその少女に駆け寄っていった。

どうやら知り合いのようだがこいつも人間じゃなさそうだ。なんとなくそんな気がする。

「誰だ？」

「私は大妖精っていいます。みんなは大ちゃんて呼びますけど」

ダイヨウセイ？とりあえずは大ちゃんというらしい。チルノと違ってこっちは話が通じそうだな。

「さっそくだがちょいと聞いていいか。いったいここはどこなんだ？地面の上にいるってのはわかるんだが」

俺はとりあえず質問した。他にも聞きたいことはあったがとりあえずここがどこかまずは確認しなけりゃならないだろう。霧で何も見えないし。

大ちゃんは俺を見ながらすこし考えて話し始めた。

「その様子だとおそらくカミナさんは外から来たんですね。いきなりいわれても分からないでしょうけど、ここは幻想郷の霧の湖です」

聞いたことのない名前ばっかりだ。やっぱりわからねえ。

「ゲンソウキョウ？霧の湖？よくわかんねえ・・・うん、さっぱりわからねえ！！それより腹が減っちまった」

分かってることは腹が減ってるってことだった。腹は減らなくなったはずなんだがどういうわけか腹ペコだ。

「凍ったカエルならあるよ。ほら」

チルノが凍った塊を差し出してきた。その中央には緑色の生き物が見える。一応食い物らしい。

「ん？おお、すまねえ。んぐぐぐ・・・なかなか硬いな」

それはかなり硬かった。氷の固まりだし当たり前だが。

「ちょ、ちょっと！それ生ですよ」

大ちゃんは驚いた顔でこっちをみている。なにかおかしいことでもあるのだろうか？

「うまいかカミナ」

チルノは得意げにこちらを見ている。どうやら感想が聞きたいらしい。

「冷たくてよくわかんねえ。ま、腹のたしにはなった。ありがとなチルノ」

それを聞いてチルノはにっこりと笑った。さっきまでのやり取りが嘘のようだ。そんな俺たちを見て大ちゃんはほっとしたような呆れたような表情だ。

「・・・とりあえず博麗神社に行きましょう。あそこなら多分なんとかしてくれると思います」

博麗神社という言葉を聞いてチルノはおおと声を上げた。

「霊夢のとこか。最近いってないな。あたいもいくぞ」

どうやら霊夢というやつが重要らしい。

「じゃあ三人でいきましょう。私もすこし霊夢さんに聞きたいことがあるし・・・かまいませんかカミナさん」

そういわれても俺にはそうする以外なさそうだ。

「かまいやしねえが、その霊夢ってやつがなんとかしてくれるのか」

「そうです。霊夢さんは博麗神社の巫女ですから」

巫女？よくわからん。だが行くしかない。

「それじゃあ道案内を頼む。しかし霧でぜんぜん見えねえな」

辺りはあいかわらず霧で何も見えない。

「ここはいつも昼間はこんなかんじですからね、私たちはなれてますけど。ただ最近はなぜか夜でも霧が消えないんです」

大ちゃんは困っているといった感じの口調だ。

「なんでだ」

「それがわからないので霊夢さんに聞こうかと思いまして」

そして俺は歩き出した。濃い霧の中を二人の妖精に連れられて。

わかねえ・・・ここがどこで何のためにここにいるのか、俺には
さっぱりわからねえ・・・。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1（後書き）

第1話です。グレンラガンといえばシモンよりカミナな作者です。もっと速いペースで書きたいのですが、なかなか手が進みません。でも書き始めてしまったのでなんとか終わりまでたどり着きたいものです。

では次回まで失礼します。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その２（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#．1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その2

霧の湖から博麗神社を目指して三人は歩いていた。視界に広がる霧はいまだ晴れず、辺りに何があるのかまったく分からない。

「何にも見えねえな。ほんとに道わかってんのか？」

「うん、こっちを行けばそのうち山道に出るぞ」

「あと少しすれば霧も晴れてきます。はぐれないで下さいね、カミナさん」

「へい、へいっと」

二つ返事をしつつカミナは思う。やっぱり分からないと。

なぜ自分はここにいるのか、なぜ『博麗神社』とかいう所に向かっているのか、そもそもなぜ自分は生きているのか・・・。

今状況に流されているのははっきりと認識できる。だが、この状況の原因の部分がどうも思い出せない。おぼろげに覚えているのはあの胡散臭い女『八雲紫』の事だけだった。シモンやヨーコ達を仲間と見送った後、あの女はどこからともなく現れ自分に何かを頼んだ。そして気がついてみればこの状況だ。

「あ～わからねえなー！畜生！・・・うん、考えるの中止だ！！」

とりあえずカミナは考えるのを止めて歩くことにした。分からないことを悩むのは性に合わない。とりあえず突き進むのが自分のポリシーだ。

「大ちゃん大ちゃん、なんかカミナがぶつぶつ後ろでいってるぞ」
「大丈夫よチルノちゃん。なんか吹っ切れたみたいだし」
「おう、その通りだ！行こうぜ二人とも」
そしてしばらくたわいのない会話をしながら大妖精達の後をついて行くと徐々に霧が薄くなり、気がつけばカミナは山道を歩いていた。
「・・・で、大ちゃんもチルノもその妖精ってやつなのか」
「ええ。ちなみにチルノちゃんは氷の妖精でわたしは普通の妖精です。まあ普通っていうのであってるかは微妙ですけど」
普通の妖精といわれても、そもそもカミナは妖精の基準が分からないのでとりあえず頷いて見せた。周りに目をやると木々が生い茂り深い森を形作っている。カミナのいた世界とはまるで違う。
「しかしここら辺は木ばっかりだな。俺がいた場所は岩と砂だらけだったぜ」
「そうなんですか」
「ああ。しかもみんな地面の下で暮らしてやがってな、俺は地上に兄弟と出たんだ」
「地面の下か、おくう達みたいだな。カミナには兄弟がいるのか」
「おう！シモンってやつでな天を貫くドリルを持つ弟よ！！」

そういってカミナは誇らしいげに空を見た。思うことはたくさんあるがなんとなく空を見上げたかった。あの日見た空を思い出すように。

「じゃあカミナさんはお兄さんですか」

「そうだ。俺がアニキってわけだ。まあ、血は繋がってはいねえが魂が繋がってる兄弟なんだがよ」

魂の兄弟という説明はいまいちわからなかったがカミナの顔を見て大妖精は納得することにした。

「はあ・・・よく分かりませんが、いい弟さんなんですね」

「ん？なんで分かるんだ？」

大妖精は少し微笑みながらカミナを見て告げた。

「だってカミナさんすごくいい顔してましたよ。弟さんの話をしてるとき」

それを聞いてカミナはすこし照れくさそうな表情をしたがすぐにまた遠い目で天を見上げた。

「あいつはすげえやつさ。まあ、もう会えねえけどよ」

「どうしてですか？帰ったら・・・」

大妖精が言い終える前に突然カミナは叫んだ。

「すまねぇ！大ちゃん、チルノ！」

「え・・・っきゃ！」

とっさにカミナは二人をつかみ隣の茂みに倒れこんだ。

次の瞬間三人の歩いていた場所に何かが撃ち込まれ爆ぜた。閃光の後に爆発音が響き、その場所には穴が開いている。そしてカミナは前方にこの場所に似つかわしくないものを見ていた。

「なんだありゃ、鉄の化け物みたいなやつがいやがる。知り合いかチルノ？」

「あんなやつ知らない。はじめてみるぞ」

それはあきらかに異質な存在だった。人の形はしていたが全身は鉄で覆われており大きさは２ｍ以上はある。歩くたびに機械の作動音と鉄と鉄とが擦れあうような音がし、その前方に突き出された右腕からは硝煙が上がっている。

「おうおうおう！誰だてめえ！！」

威嚇するようなカミナの口調に対して返事はなく、その異形はただ一言、

『・・・・・排除・・・・・』

と、くぐもった電子音でつぶやきそれが答えのようだった。

「たいしたあいさつだな。下がってなチルノ、大ちゃん」

カミナは刀を構え二人の前に立った。

「カミナさん！？」

大妖精は心配そうに目の前の異邦人を見た。

「おら！いくぞ機械野朗！」

カミナは一直線に異形へと飛び込み、相手の懐を狙いすれ違いざまに一閃した。異形は何の抵抗もせず腹の上辺りから真っ二つになり地面へと倒れた。

「おお！すごいぞカミナ！！」

その様子にチルノはおおいに興奮し、大妖精はほっと胸を撫で下ろした。

しかしカミナは手応えのなさに違和感を覚える。

・・・おかしい・・・

相手はどう見ても鉄で覆われた機械の塊だったはずだ。それなのに刀はすんなりと鉄の装甲を切り裂き相手は真っ二つになった。後ろを振り向き倒れた異形へと目をやるとその体は徐々に黒ずみ地面に溶けるように消えていく。

「大丈夫ですかカミナさん。怪我とかしませんでしたか」

大妖精とチルノが駆け寄ってきたがカミナは後ろを向いた。

「どうしたカミナ？」

彼の直感は何かを告げていた。

「いや、どうやらまだ終わってねえみてえだぜ」

直後カミナ達の前方に巨大な対極図のような魔方陣が現れ、そこから次々と機械の異形が出現する。形はさまざまで先ほどの異形と同じ物も見受けられた。

異形の群れの視線はカミナ達に向けられている。

「あんなにいっぱい・・・」

大妖精は息を呑んだ。どう考えてもこちらのほうが分が悪い。しかし残りの二人は違うらしい。

「グレンがありゃまとめてぶっ潰せるんだがな。無い物ねだりしても仕方ねえ・・・よし！まとめてかかってきやがれ！男カミナ逃げも隠れもしねえぜ！！」

「あたいもいるぞ！まとめて雪像にしてやるさ！！」

やる気十分な二人に大妖精は泣きそうな声でつっこむ。

「ちょ、ちょっと！ざっと見て三十体以上はいますよ。いくらなんでも状況がまずいです。いったん逃げましょう」

そんな彼女を尻目にカミナは叫ぶ。

「ここで逃げたらグレン団の名折れだ！いくぜチルノ、大ちゃん！

今日からお前らもグレン団だ！！」

「おう！！」

「ええー！？」

カミナとチルノが突撃しようとした刹那、異形の群れを横一列になぎ払う閃光が轟音とともに彼等の目の前を通り過ぎていった。

「何だこりゃ？」

「むむむ！この光はまさか・・・」

目も眩むような閃光の後に残ったのは数体の異形と残骸だけだった。

そして閃光が来た方向から何かが飛んでくる。それは箒に乗った少女であった。少女はカミナ達の前に降り立つ。

「へへッ、珍しい客を連れてるなチルノ」

軽い調子で黒と白の少女はこちらを見ている。目を引く大きな帽子、左手に箒、そして右手には八角形の石のようなものが収まっている。

「魔理沙！」

どうやらチルノの知り合いらしい。少女は残りの異形のほうを見た。ほとんどは消し去られたようだがまだ動いているものも数体いる。それらは少女に銃口や武器を向けていた。

「ありゃ？まだ残ってる。こっちのもしぶといみたいだな。ちょっと下がってな、もう一発ぶち込んでやるから」

魔理沙は右手を異形へと向け、さらに左手も添える。直後手の中に収まっている八卦炉が展開し光があふれた。

「モード変更、出力１０パーセント追加・・・いくぜ！マスタースパーク！！」

次の瞬間、エネルギーの塊が一直線に残りの鉄の化け物達を直撃した。先ほどよりも閃光は大きいが範囲は短い。光と轟音の後には削られた大地と倒れた木々、そして文字通りのガラクタが残っているだけだった。

カミナはそれを見て驚異とも感嘆ともとれる声をあげる。

「まったくとんでもねえ威力だな。誰だいあんた？俺はカミナ、グレン団のカミナだ」

「霧雨魔理沙（きりさめまりさ）、ただの魔法使いさ。まあみんな泥棒とか変人とか好き勝手いうけどね」

魔理沙はガラクタとなった異形を見た。残っている残骸は少しずつ黒ずみ氷の結晶が砕けるように消えていく。

「しかしここにもこういう変てこなやつがいるんじゃ霊夢のところに急いだほうがよさそうだな」

ここにもという言葉に大妖精は反応した。

「えっ、他でも出たんですか？」

「ああ、姿は違うけど香霖堂にも出たんだ。まあ、やっつけたのはニトリと外から来た人間だけどね」

「外の人間ですか。珍しいですね、二人続けて外から迷い込むなんて」

「そういうもんなのか？ああ～なんかごちゃごちゃして・・・」

突然カミナは視線を感じて森の奥を見た。そこには黒い影が佇んでおりその影は少女に見えた。

「おい、あれは誰だ？」

「どこですかカミナさん」

カミナは黒い影のいる辺りを再び見たがそこには誰もいない。カミナは首を傾げた。

「おかしいな、たしかに黒い服を着た子供が立ってたはずなんだが・・・」

「たぶん里の子供じゃないか。まあ、めったにここら辺じゃ見ないけど。とりあえず博麗神社に急ごうぜ」

魔理沙は箒にまたがり道を進む。その後に大妖精とチルノが続く。

「置いてくぞカミナ」

カミナは立ち止まりあの影が見えた場所を睨んでいたが、チルノ

に声をかけられ再び歩き出した。

「おーう、今行く・・・しかしなんだったんだ、あの影は」

疑問は増えるばかりだが今は霊夢という人物に会うしか道はなさそうだ。とりあえずはそれしかない。そう自分を納得させカミナはチルノ達の後をついていった。

――

カミナ達が見えなくなった後、異形が消えていった場所に先ほどよりも小さい対極図のような魔方陣が現れ、そこから黒い少女が出てきた。少女は削り取られた大地や倒れた木々を見ながら一人つぶやく、

「ありゃりゃこっちもか～残念。でも派手にやりすぎだよね～可哀相に」

そういって札のようなものを取り出し真上に投げた。その直後、削れた地面も倒れた木々も時間が巻き戻るように元に戻っていく。だが音さえしない。ただ元に戻っていく。

「まあせっかくのお客さんにこの程度でいなくなってもらっても楽しくないし、いいかな・・・まだまだ遊び足りないお友達も大勢いるしね。じゃ～また会おうね、螺旋の勇者さん♪」

そして少女はカミナ達の歩いていった方向を見ながら魔方陣に消えていった。後にはただ深い森が何事もなかったように佇んでいる。

一行に魔女が加わり再びカミナ達は博麗神社を目指す。
黒い不吉な影に見送られながら・・・。

同時刻　香霖堂前

「よし、戸締りは終わったよ。残りの壊れたところは、まあ帰ってきてから考えるとしよう」

壊れた店の入り口に応急措置の板を張り終え、香霖堂店主『森近(もりちか)霖之助(りんのすけ)』は後ろにいる二人を見た。一人はラフな格好の髭面の男、もう一人は大きなリュックサックを背負った少女だ。

「すまないなリンノスケ。帰ってきたら私も手伝おう」

答えた髭面の男の手には見るからに硬質そうな赤いケースがぶら下がっている。

「そうしてくれると助かるよ。僕らはこれから霊夢のところに行くけど、にとりはどうする？」

問われた少女は少し考えてから言った。

「う～ん色々気になるからあたしも行く。これはただ事じゃすまないような気がするんだよね」

「その予感は外れてほしいけど難しそうだな。じゃあ出発だ」

歩き出す二人を尻目に髭面の男は思い返す、どうしてこうなったのかと。

「どうしたの？行こうよトニー」

「ん、ああ・・・すまない」

そして彼等も博麗神社へと向かったのだった。

カミナが霧の湖に飛ばされる前、すでに幻想郷に招かれた客人が一人いた。

次回、『装着せよ。強き自分』

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その2（後書き）

第一話終了です。もっと短く分かりやすい文章にしたかったのですが、無理でした。
次回は黄金の英雄に話しが移ります。とりあえずなるべく早く続きを書きたいです。
では次回。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1

「リンノスケ、急げ。ほかに電子機器みたいなものはないか？」

その男は不機嫌そうに白髪の青年に問いかけた。

「残念だがそれだけだよ。前はいくつかあったんだが正しい使われ方をしないうちにガラクタになってしまってね。あれは今思うともったいなかった。ああ、でもたしか残骸が残ってたな」

香霖堂店主『森近霖之助』は下に置いてあるいくかの箱の中から無造作に一つを男に渡した。

「これはゲーム機じゃないのか。たしか日本製のなんたらXとかいったクソ高くて売れなかったやつだ。それに日本版のNESまで混じってるぞ」

「あれ？間違ったかな・・・ごめん、こっちだった」

「まったく。まあPSなんたらの部品は使えそうだな」

男は慣れた手つきでゲーム機のカバーをはずし中身を分解していく。そして不要な部品は即座に投げ捨てられた。その様子に霖之助は感心する。

「しかし、まるで魔法のような手さばきだね。外の人間は何人か見てきたが君のように機械に詳しい人間は初めてだ。いったい何者なんだい？」

「そうだな、あえていうなら正義の味方といったところか。あと会社の社長もやってる。ついでに国防関係の組織にも所属してる」

その男、『トニー・スターク』は当然といった様子で答えた。その間も手は止まらず作業を続けている。

「色々兼任してるみたいだけど、正義の味方っていうぐらいだからそのＭｋ－？て鎧を着込んで戦うわけだ」

コウリンの視線の先、作業中のトニーの目の前には全身が鉄板で覆われた無骨な銀色の鎧・・・もといパワードスーツが立っていた。所々塗装や英語で書かれたロゴが見え胸板の中心にはぽっかりと丸い穴が開いていた。そこにトニーは何かを取り付けている。またスーツからはコードが伸びておりそれは霖之助のＰＣに接続されていた。

「Ｍｋ－？は私がはじめて作ったスーツでね。命の恩人に手伝ってもらってなんとか完成した代物だ。まあ、最新型と比べるときついが今はこれしかない。心許ないが一応急ごしらの装備も追加した」

アフガニスタンでの出来事とインセンのことが一瞬頭をよぎるがその記憶に浸る余裕は今はない。トニーは急いでＰＣを操作しスーツの制御ＯＳを立ち上げた。

「よし、これで起動準備は終了だ」

その時、外から銃器の発射音や何かがぶつかったり弾かれたりするような音が響いてきた。状況は切迫しているようだ。

「外が騒がしくなってきたがあの子は大丈夫なのか？」

「魔理沙は大丈夫さ。こういう厄介事には慣れてる。でも急がないとね」

今外では魔理沙が一人戦っていた。敵の数は不明だが明らかにこちらを狙って攻撃を仕掛けてきている。

「リンノスケ、今からこいつを装着する。ＯＳのほうは急ごしらえでいまいちだがやるしかないだろう。そこの工具でボルトを締めてくれ。時間がない」

「まかせてくれ」

トニーはスーツを装着しながらどうしてこのような状況になったのか思い出していた。あれは前日の夜、自宅の工房でスーツのメンテナンスをしていた最中のこと・・・。

「こんばんは、Ｍｒ．スターク」

それは聞いたことのない女の声だった。反射的に振り向けば東洋風の格好をした女性が立っている。女性は室内だというのに傘を差しどことなく胡散臭くも妖艶に見えた。

「君は誰だ？どうやってここに入ってきた。今日はとくに誰も呼んではいないんだが・・・」

はてとトニーは考えた。今晩は何の予定も約束もはいってはいな

いはずだ。それともまた何か忘れているのだろうか。ペッパーに聞いてみるべきかと思ったが女性は軽く笑いこう言った。

「うふふふ。残念だけどそういうのじゃなくてね。じつはお願いがあってお邪魔させてもらったのよ」

「お願い？」

「そう、あなたの力を・・・アイアンマンの力を貸してほしくてね」

次の瞬間、床に何かが現れた。それは女性の足元から工房全体を呑み込むように広がっていく。まるで何かの裂け目のように。

「これは一体！？」

「スキマよ。あなたを招待するためのね。私は八雲紫。くわしくはあっちで」

「ちょっとまて、わけが分からな・・・」

「残念だけど時間がないの♪どうかよい夢を」

そしてトニー・スタークは工房ごとスキマに呑み込まれ意識を失った。

――――――――ひどく頭が痛む。スーツのメンテナンス中に相当飲んだのがいけなかったのだろうか。一体今は何時だろう。たしか今日はニック・ヒューリーにシールドの件で呼ばれていたはずだ。

遅れると後が面倒になる。

「・・・おいジャーヴィス・・今は何時だ・・・ジャーヴィス？」

しかし彼の忠実な執事とも呼べるそれの声は聞こえない。

「おッ！目を覚ました。おーい香霖！」

かわりに元気のいい少女の声がする。

「ここは・・・一体どうなっているんだ」

まぶたをひらいて彼は驚く。そこは見知らぬ場所だったのだ。どことなく古い時代の日本を思い起こさせるような室内で彼は布団に寝かされていた。こういう経験は二度目だがゲリラの本拠地で目覚めるよりはだいぶましだと思う。

体を起こし周りを見回していると入り口の障子から、青い着物風の服を着た白髪に眼鏡の男が入ってきた。その後ろには金髪の少女が立っている。

「君はうちの店の近くで倒れていたんだ。それをここにいる魔理沙が見つけて担ぎ込んできたわけさ」

「なかなか重かった。箒の寿命が短くなったかも。じゃ私はこれで帰るぜ。あとはよろしく」

「おいおい。彼を霊夢のところに連れていってくれないのか」

「ちょっとにとりに呼ばれてるんだ。なんでも面白そうなものを見

つけたとかでさ。待たせちゃ悪いから私は行くよ。じゃ」

そういうと少女は出て行ってしまった。男はやれやれという素振りをしている

「まったく」

「なかなかいい性格の娘だな。礼も言わせてくれないとは」

状況は理解できないがどうやらあの少女に助けてもらったようだ。

「昔からああなんだ彼女は。たぶん死ぬまであの性格は直らないと思うね。そういえばあんた名前は」

「トニー・スタークだ。で、そっちは？」

男は一瞬しまったという表情をしたがすぐに咳払いをして再び口を開いた。

「おっと失礼したトニー・スタークさん。僕は森近霖之助っていうんだ。まあ、しがない道具屋の主人だよ」

『モリチカリンノスケ』、日本人の名前の響きだ。それに先ほどの少女は『マリサ』と呼ばれていた。室内を見る限り作りは間違いなく日本のそれだ。つまりどういう理屈かは分からないが自分はなぜか日本にいる。どういうことだろう。

だがトニーはそれよりもおかしなことに気がついた。どうして自分は彼等と同じ言葉を話しているのか。意識して日本語は使っていない。それなのに確かに今自分は日本語で話をしている。それもごく自然に。

「状況を確認したい。ここはどこなんだ。少なくとも私の家でもなければアメリカでもなさそうだが日本なのか？それになぜ私は普通に君と会話できる？日本語は一応話せるがこんな流暢には話せないしそもそも・・・」

わけが分からない、おそらく自分はどうしようもなく混乱しているのだろう。だが聞かずにはいられない。ここがどこなのか、なぜこんなにも他の言葉を使えるのか、そもそも自分はどうなってしまっているのか。

「だいぶ混乱してるみたいだね。まあしょうがないけど。とりあえず今いる場所は僕の店兼家の香霖堂さ。もっと正確にいうなら君が今いる世界は幻想郷という場所だ。君がいた世界とは隔離された特殊な世界としか説明できない。それとすまないが言葉についてもよく分からない」

トニーはますますわけが分からなくなった。しかし一つだけ思い出したことがある。おそらく自分をこの状況に追い込んだ人物、八雲紫のことだ。

「そういえば女性が近くにいなかったか。胡散臭いというか妖艶というか・・・たしか八雲紫というんだが」

『八雲紫』という言葉が出てきたことに霖之助は驚いた様子でトニーを見た。

「まさか外の人間から彼女の名前を聞くことになるとはびっくりだね」

「どういうことだ？」

霖之助はトニーに自分の知りえる限りの紫の情報を教えた。そこから理解できたのは彼女が人間ではないこと、非常に長く生きていること、さらに神出鬼没で本当に胡散臭いということだった。

そしてトニーもスキマに飲み込まれたときのことを彼に話した。トニーの話を聞く霖之助はある言葉に強く反応した。

「招待か。いったいなんだろう。そもそも幻想郷に外から来るのは、妖怪の類かたまに迷い込んでくる人間か道具くらいなんだけどな。それに彼女、妖怪の誘致をしているとは聞いてるけど人間を招いたなんてのは初耳だよ。あっ、それと稀にだけど神様とかも来るんだよね。この世界」

彼の知っていることはどうやらこれで全てのようだ。情報は増えたものの逆に疑問は増える一方だ。

「モンスターに神か、なんだか眩暈をおこしそうな話しだ。まだ私は夢から覚めていないのかな・・・そういえば昨日は飲みすぎてたしな。うん、もう一度寝よう」

「信じがたいのは分かるけど残念ながら現実だよ」

再び布団を被ろうとするトニーに霖之助は続ける。

「まあ考えてもしょうがないこともあるさ。向こうでお茶でもどうだいトニー・スタークさん。一応打開策もないこともないし」

打開策という単語を聞いてトニーはとりあえず考えるのを止め布団から出た。確かに彼の言う通りかもしれない。それに自分は混乱

しすぎてネガティブな思考に陥っているようだ。少し落ち着く必要もある。

「すまないがそうさせてもらおう。それと堅苦しいからトニーでかまわない、リンノスケ」

霖之助の後について部屋を出ると廊下には様々なものが重ねられていた。見るからに古い形の家具、新品同様の旧式ビデオレコーダー、何に使うのか検討もつかない器具・・・それらありとあらゆる種類の道具が無造作に重なり合っている。

「いや～整理が苦手なもんでさ。いつの間にかこんなふうになってたよ」

それ以前の問題のような気がしたがトニーは気にしないことにした。

廊下を抜けると店の玄関に出た。そこには商品と思しき道具が陳列されている。廊下ほどではないもののお世辞にも整理されているとは言いがたい。例えるならフリーマーケットやガレージセールのような状態だ。

一通り商品を見回しているとそこには見慣れたものが置かれていた。

「！！・・・Ｍｋ－？じゃないか」

そこに立っていたのは彼が最初に装着したアイアンマンだった。鉄板を張り合わせた装甲は鈍い輝きを放っている。

「これかい？店の近くにバラバラになって落ちてたんだ。それを魔理沙の知り合いが組み立ててくれてね。ちょうど君が運ばれてくる

前だったかな。」

どうやらこの世界に飛ばされてきたのは自分だけではなかったようだ。トニーはＭｋ－２に手を触れスーツ全体を確認した。目立った損傷は見当らず問題なく動きそうだ。

「これは私のだ。他には何かなかったか？」

「いや、これだけだったよ。何か足りないのかい」

「なんともいえないな。こいつはこれで全部だが他のやつもどこかに転がっているのかもしれない」

他のスーツもこの世界にあるのだとすれば見つけ出す必要がある。そう考えていると突然玄関が勢いよく開いた。

「おい！香霖！！」

「あれ？にとりのところに行ったんじゃないのかい」

玄関から慌てた様子で魔理沙が駆け込んでくる。何があったのだろうか。

「なんかやばい連中が店に向かってきてるから戻ってきたんだよ！」

「へ？やばい連中。どんな人達なんだい」

魔理沙はどう説明していいものか迷っていたが、トニーの横に立つＭｋ－２を指さし叫んだ。

「ありゃ人じゃないよ。なんか機械っていうか・・・そう！そこの鎧をもっと強そうにした感じのやつらだよ」

その言葉にトニーは急いで玄関から飛び出し辺りを見回す。だがここからでは何も確認できない。後ろから出てきた魔理沙はあっちだと道の向こうを指差したが、まだ影も形も見えない。

「リンノスケ、双眼鏡はないのか。望遠鏡でもかまわない」

「一応あるけど。はい」

店の中から使い古された双眼鏡が手渡された。レンズを覗き少女の指す方向を見ると、そこには全身が装甲で覆われた機械の兵士達の姿が見えた。

トニーは驚く。あれは確かにスターク・エキスポで自分と相棒が破壊し、最後には全機自爆したドローンだったのだ。それはジャスティン・ハマーが製作しイワン・ヴァンコが暴走させた、ＡＩで動く無人のパワードスーツだ。

それらの中にはまったく姿の違うものも混じっているが問題はそこではなかった。

「間違いない。見たことのないタイプも混じってるがあれはハマーのところの出来損ないだ。なぜここにあんなのがある」

不味い状況だとトニーは思う。手元にあるのはＭｋ－？だけ。せめてＭｋ－？があれば対処も出来た。どうするべきかトニーは思考を巡らせる。

「オッサン、知り合いだったら文句言ってくれないか。あいつら近づいたら問答無用で撃ってきたんだぜ。当たったら危ないっていう

のにさ」

「その割にはずいぶん余裕だな。あと私はオッサンじゃなくトニーだ。それと、残念ながらあいつらに話しは通じない。工具とＰＣはあるかリンノスケ」

「ないこともないけど、どうするんだい」

トニーは香霖堂を見て言った。

「中のＭｋ－２で迎撃する。不安はあるがやるしかない。用意を頼む」

霖之助は無言で頷き店の中へ走った。一方魔理沙は帽子を被りなおし、店先に立てかけられた箒を手にする。

「さっきの鎧を着るんじゃ時間稼ぎが必要だな。なるべく早くしてくれよオッサ・・じゃなくてトニー」

「何をする気だ」

「ちょこっと遊んでくるだけさ。こういうのは嫌いじゃないんだ私」

それだけ言って少女は箒に跨り空へと飛んでいく。トニーはただ呆然とそれを見ていた。

「・・・まったく、本当にいい性格だ。それに空も飛べるとは本当に分からない世界だな、ここは」

店の中に戻ると工具箱をもった霖之助が彼を呼んだ。

「うちにあるのはこれだけだよ。ＰＣはそこにあるのを使ってくれ」
「わかった。それとすまないが電化製品があれば片っ端から持ってきてくれ。少し改造が必要だ」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

・・・そして現在の状況に至る。

あのジャスティン・ハマー製のドローンを相手にするにはこのＭｋ－？では役不足だ。機動力でもパワーでも劣っている。せめてもの救いはその場凌ぎで取り付けた簡易式のユニビームだけだ。状況は悪いが今はやるしかない。

「締め終わったよトニー！」

ボルトの固定を確認しトニー・スタークは全身に力を入れる。
あの八雲紫という人ならざる者はなぜ自分をここに招待したのか。そしてどうして破壊したはずのドローンがこの世界に存在しているのか。考える余裕もなく彼は扉の向こう側へ鋼の足を踏み出した。

『よし、いくぞ！！』

再びＭｋ－？は動き出す。存在しないはずの敵を迎え撃つために・・・。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1（後書き）

第二話になります。前よりもさらに長くなってしまいました。短く分かりやすくって本当に難しいですね。
今回はアイアンマンからトーニー・スタークの登場です。マーベル・コミックのヒーローチーム『アベンジャーズ』の中心メンバーとして長く活躍している人気ヒーローですが、日本ではあまり有名ではありませんでした。一応アニメや格闘ゲームなどで活躍していましたが、実写映画が公開されて一躍有名になった印象が強いです（私も映画で知りました）。
次回はもう少し分かりやすくまとめたいです。
それではまた・・・。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2

「鈍い連中ばっかりで厄介だな。畜生」

魔理沙は空中で旋回しながら悪態を吐いていた。それは彼女の真下、香霖堂近くの道で蠢く機械の兵士達に向けられたものだった。その数は五体。彼らは香霖堂を目指しているらしく威嚇でスペルカードを使ったが反応はなかった。続けて魔理沙は実際に攻撃力を持つ魔法を数発放ったがそれも無視されていた。

「ここいらでドカンと一発当ててやるしかないかな」

箒の先端部の紐に吊るされた八卦炉に魔理沙は手を伸ばそうとしたが地上から攻撃が来た。

瞬時に体を傾け銃撃をよける。どうやら相手はこちらの動きを一応は警戒しているらしい。

「ったく、鈍いのか鋭いのか分かりづらいったらありゃしない。こうなったら手数で攻めるしかないな」

魔理沙は箒を上に引き急上昇した。そしておもむろにポケットからカードを二枚取り出し前方に投げ呪文を唱える。直後にカードは薄緑の光に包まれ球体を形成した。

球体は箒の動きに合わせるように魔理沙の左右を浮遊している。

「これならどうだ！」

眼下の標的をめがけ一気に急降下する魔理沙の左右の球体からは、純粋な破壊の力を持った魔法の弾丸が高速で発射されている。それ

に対して地上のドローン達は内蔵された銃器で応戦する。敵の反撃をぎりぎりで回避し魔理沙は再度上昇した。

「ようやくこっちを向きやがった。もう一回いくぞ！」

再度急降下をしようと反転する魔理沙だったが、地上から思いもよらないものがこちらへ向かってきた。それは先ほどまで地上にいたドローン達だった。

「なんだよ。あっちも飛べるのかよ。本当に厄介な連中だぜ」

ドローンは三機で残りの二機は地上から攻撃を続けている。目の前の状態に魔理沙は苦笑いする。

「さすがに一対三は面倒くさいな。しかも応援つきだぜ」

その時だった。高速で迫るドローンの一機に背後から光が直撃し、きりもみしながら墜落した。地上を見下ろせばそこには香霖堂でみた銀色の鎧が胸から煙を上げ立っている。鎧はこちらを見上げ叫ぶ。

『待たせたな！かりを返させてもらうぞ！』

どうやらあの男、トニーは間に合ったようだ。

「これで一対二か・・・ついてきなガラクタ三等兵！」

魔理沙は急加速し残った二機のドローンと空中戦を開始した。

――――――――――――――――――――――――――――

『さて、なんとか一機は落とせたが・・・』

地上でトニー・スタークは道の先に立つ二機の人型を見つめていた。一機は陸軍仕様のドローン。もう一機は見たことがないタイプの敵だ。

『あのメカは一体なんだ。とてもじゃないがハマーが作ったやつにも見えないし』

それは明らかに異質なパワードスーツだった。ドローンより一回り小さく、非常に簡素なフォルムはレトロなブリキのロボット玩具を連想させた。しかも星条旗が胸の辺りに描かれている。つまりアメリカが関係しているのかもしれない。だがトニーはあんな形の兵器は見たことがなかった。これでも元はアメリカ軍の兵器開発に従事していた身である。似たものを見たことがあれば記憶に残っているはずなのだ。

しかしトニーはその考えを打ち切った。優先事項は思考するよりも行動することだった。

『今はそんな場合じゃないな』

さきほどの攻撃はなんとか空中の敵に命中し落とすことに成功したが、Ｍｋ－？に追加したユニビーム発射機構はアーク・リアクターからのパワーに耐え切れず壊れてしまっていた。やはり有り合わせの急造品では無理があったようだ。

残りの武装は両腕の火炎放射器のみ。かつては左腕部に小型のロケット弾が装備されていたが現在のＭｋ－？には発射ガイドしか残っていない。相手は無人のパワードスーツだ。たかだか火炎放射で

は目眩ましにもならないだろう。となれば物理的な衝撃でエネルギーコアか中枢部を破壊するしか動きを止める方法はない。

『近接戦をこちらから仕掛けるしかないか』

分の悪い勝負なのは最初から分かっていた。射撃できる武器もなくパワーでもスピードでも劣っている以上、不用意に相手に格闘戦を挑むのは自殺行為に等しい。しかし他の戦い方は残されていない。すでに敵は目の前に迫っていた。それに相手はどういうわけか銃器を撃ってこない。先ほどの空への援護で弾切れを起こしているのだろうか。だが確認している余裕はなかった。トニーは正面から陸軍仕様のドローンに突進した。

『っく！！』

鉄と鉄とがぶつかり合う金属音が響いてＭｋ－？とドローンは地面に倒れこんだ。急いで体を起こそうとするトニーだったが、右腕の装甲の一部が敵にひっかかりうまく上体を起こせない。そこにもう一体の異質な敵が襲い掛かってきた。

『クソッ！これでもくらえ！』

効果は期待できないと思ったが咄嗟にトニーは左腕からの火炎を敵に浴びせた。すると敵はこちらから距離をとろうと後ろに下がった。どうやらあちらの敵には有効らしい。

引っかかったパーツを強引にはずしトニーは立ち上がる。そして横で上体を起こしたドローンの頭部に真上から右ストレートを叩き込んだ。パーツの砕ける音と、けたたましい電子音が響きドローンは再び地面に倒れこむ。

『少し寝ていろ』

これでしばらく隣のドローンは動けないはずだ。視線をこちらから距離をとった敵に向け両椀を構える。この腕に装備された火炎放射器はある程度の調整ができた。最大出力で放射すればかなりの距離が稼げる。この間合いであればおそらく届くはずだ。

『バーベキューは好きか？私は嫌いじゃない』

敵に炎を発射しようとした刹那、突然霖之助の叫ぶ声が聞こえた。

「後ろだー！トニー！しゃがめー！！」

その声にトニーは急ぎ体を下げた。その直後、左腕の肩部装甲が弾け飛び背面の駆動ユニットの一部も破壊された。スーツの機能が低下したせいで上半身がいっきに重くなる。

後ろを振り向けば先ほど墜落した空軍仕様のドローンがこちらに武器を向けている。そのボディーはユニビームと落下のダメージで破損しているが動作に問題はないようだ。

『仕留めそこなったか・・・』

戦況は限りなく不利となった。前後を敵に挟まれ、横ではいつ再起動してもおかしくない状態のドローンが転がっている。しかも今の攻撃でこちらはまともに体を動かせなくなった。このままでは三方向から袋叩きだろう。

『万事休すか』

だが次の瞬間、突然背後に立っていた空軍仕様のドローンは何か

に殴りつけられたかように横に飛ばされ、同時に周囲は黒い煙に包まれる。トニーの目には一瞬ドローンが立っていた空間が歪んだように見えた。
そして辺り一帯は煙が広がり視界も確保できない。この状態でどう行動するか考えていると、

・・・・・・動かないでね・・・・・・・

囁くような少女の声が聞こえＭｋ－？は何かに掴まれ持ち上げられ移動をはじめた。

『！？』

困惑するがどうすることもできない。しばらくしてトニーは唐突に黒い煙の中から脱出した。そして頭部のアーマー前部を開放し横を見ると、霖之助も同じように宙に浮いていた。そして彼は自分とトニーの間の歪んで見える空間と会話をはじめた。

「ナイスなタイミングだ。助かったよ」

『魔理沙が来ないから迎えにきたんだけど、なんか緊急事態みたいだったから』

その空間から聞こえる声は先ほどの少女の声に間違いなかった。どうしたものかと悩んでいると香霖堂の近くまで来ていた。

『じゃあ降ろすよ。ついでに解除っと』

地面に降ろされた直後、目の前の空間からカラーインクが染み出すように一人の少女が現れた。

大きめの緑色の帽子を被り、髪は青く洋服は水色だった。そして背中に大きなリュックサックを背負っている。

「さすがに大人二人は重いね。アームに補助動力追加しておいてよかったよ。怪我とかない？」

少し心配そうにこちらを見ている少女にトニーは聞かずにはいられないことがあった。

「まさか光学迷彩か。ありえない」

驚いたトニーを見て誇らしげに少女は胸を張った。

「はっはっはオプティカルカモフラージュさ！河童の科学は幻想ィィィィィ！！」

「はあ、こういう時のテンションは高いよね」

軽くため息をつき霖之助はトニーに視線を向けた。

「バラバラだった君の鎧を組み立てたのは彼女なんだよ。店の常連さんでね」

「なんかすごく面白かったよその機械鎧。ええと・・・ああ、あたしは河童の『河城にとり』。そういうメカとか大好きなんだよね」

その口ぶりから本当に機械が好きなのだろうとトニーは感じる。

一礼しトニーは少女を見た。

「私はトニー・スターク。このスーツを直してくれたのは君だった

か、感謝する。それと君が持っているケースは・・・」

にとりの左手には大きめの赤いビジネス用のケースがぶら下がっていた。その表面は硬質そうな鉄で覆われ金属特有の光を放っている。

「これ？その鎧を直した帰りに拾ったんだよ。工房で色々調べたんだけどよくわかんなくてさ。それで魔理沙に見せてから香霖堂の主人に何の道具か聞こうと思って持ってきたんだけど、もしかしてあなたの？」

「その通りだ。確かにナイスなタイミングだな。二人とも少し離れてくれ」

二人が距離をとったのを確認し、トニーはＭｋ－？の装甲強制排除ボタンを押した。一瞬で各部のアーマーが剥がれ地面に落ちる。これはスティンからＭｋ－？を回収した際に取り付けた緊急用装備だった。

「あとでまた直すしかないな。ケースをこっちに」

「え？はい」

にとりは言われるままにスーツケースをトニーに手渡した。

「よし・・・これで反撃開始だ！」

戦いはこれからが本番のようだ。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2（後書き）

アイアンマンの二回目になります。
とりあえず詳しいことは次話のあとがきで。
それでは次回

♯．２　『装着せよ。強き自分』　その３（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

・♯．２『装着せよ。強き自分』その２からの続きです。先にそちらを読むことをお勧めします。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その3

「一体どうするの？」

にとりは興味津々といった面持ちでトニーを見ていた。彼はその手に持った赤いケースを地面に設置すると、

「こうするのさ」

そう言ってケースの一部を足で勢いよく踏み込んだ。すると機械の作動音と同時にケースの内部から赤と銀の装甲が展開する。彼はその開いたケースに両腕を入れ内部からさらに装甲を引き出した。そして胸の辺りで引き出した装甲ごと腕を開くと赤と銀の鋼がスライドし彼の全身を包み込む。

「おおッ！！！すっご――――――い！！！！どうなってんのあれ！？」

「たまげたね。こりゃ・・・」

にとりは目を輝かせその姿に興奮し、霖之助は呆然とこちらを見ている。その間も鋼のスライドは続き定位置まで移動した装甲はロックされた。

そして最後、頭に銀色のマスクが装着されると胸部装甲から覗くアーク・リアクターから眩い光があふれだし、トニー・スタークは再び『アイアンマン』となった。

『こいつはＭｋ－？、携帯式のパワードスーツだ。機能は省略されているが性能的に問題ない』

トニーはセンサーを起動させ周囲をスキャンした。すると地上に三つ、空中に二つの反応がある。空中を確認すると魔理沙がドローンと激しいドッグファイトを続けていた。どうやら一機落としたらしい。一方地上では頭部を潰した機体が再起動し残りの二機とこちらへ近づいてきている。それを確認しトニーは走り出した。

「大丈夫なのかいトニー？」

『こいつなら問題ない。あとは任せろ』

前進するアイアンマンのセンサーが後ろからきた存在を知らせた。

『ニトリ？』

「その通り。備えあれば憂いなしって言うしね」

後ろからにとりが飛んできた。

『相手は戦争用の兵器だ。危険だぞ』

「それは承知してるよ。でもさ一対三じゃ不公平だよ。何があるかわかんないし」

この状況では確かにそうだ。敵の増援や不測の事態もありえる。それにここは自分の知らない世界だ。

『分かった。では君は光学迷彩で隠れつつ援護してくれ』

にとりは頷き、オプティカルカモフラージュを起動させ景色に溶け込んだ。

アイアンマンはドローンに標準をロックし腕をかざした。するとその開かれた鉄の掌からエネルギー兵器リパルサー・レイが発射される。放たれた光線は先行して進んできていた空軍仕様のドローンを一撃で吹き飛ばした。

『調子は良好のようだ。次！』

続けて、頭部が潰れかけているドローンに両手でのリパルサー・レイが炸裂し強力なプラズマエネルギーの直撃を受けた敵は爆発四散した。

さらにアイアンマンは異質な人型メカを探そうとするが、センサーに映る最初に吹き飛ばしたドローンの反応がおかしいことに気がついた。

カメラをズームし確認するとその全身は黒く変色しており、次の瞬間には氷が砕けるように消えてしまった。

『これは・・・どうなっているんだ？』

その時、にとりの雄叫びが聞こえた。

「目標確認！リミッター解除！いっけー！！」

光学迷彩が解けると同時に、彼女の背負うリュックのサイドポケットから巨大な拳が出現し凄まじい勢いで隠れていた敵に伸びる。異質な人型は避けようとするが間に合わない。

「遅い！」

加速した凶悪な拳は鉄のボディーを砕くには十分すぎた。

「デーストローイィィィ！！！」

激しい破砕音が響き異質な人型は粉砕された。やはりその破片も空中で黒ずみ地面に落ちる前に消滅する。

『これで後は空のやつだけか』

トニーは空中で戦う魔理沙を確認しようと再度スキャンを行う。すると先ほどは二つだったはずの機影が一瞬三つになった。

『まさか増援か？』

しかし詳細な分析を行う前に影はレーダーから消えた。ただの誤認だったのだろうか。

そして上空では新たな動きが生まれていた。空中で絡み合うように魔理沙とドッグファイトを続けていたドローンが突然方向を変え香霖堂へ猛スピードで向かっていったのだ。

「おいおい、なんだよ突然」

魔理沙を無視してドローンは高速でアイアンマンとにとりの頭上を通り過ぎていく。その軌道から予測される行動は店への特攻だった。しかも道と店の間には霖之助が立っている。

『まずい！リンノスケ今すぐ離れろ！！』

「店主逃げてー！！」

自分に特攻してくる形になったドローンに抗議の言葉を吐きつつ霖之助は全力疾走で店の方向へ逃げる。

「ちくしょー！何の恨みがあるんだよ！僕は関係ないじゃないか！このポンコツ！！」

アイアンマンは標準を合わせリパルサー・レイの発射体勢をとる。

『伏せろ！お前も吹き飛ぶぞ！』

その声を聞き、霖之助は道の横の草むらに飛び込んだ。アイアンマンはそれを確認しリパルサー・レイを発射した。

「僕の店――――――――――！！！！！」

放たれた攻撃は店のぎりぎり手前でドローンに命中し、閃光が周囲を包む。

こうして一つの戦いに終止符が打たれた。

――

さきほど魔理沙が戦闘していた高度の遥か上空に人影があった。

「意外と分かっちゃうのね。なかなかいい性能してるわ、あのスーツ」

その姿は少女で黒と赤を基調としたゴスロリ風の服装をしている。

少女は愉快そうに地上の彼らを見下ろし一人つぶやく。

「さすがは黄金の英雄(アベンジャー)ね、今は金色じゃないけど。でも少しお友達が足りなかったみたいね。次から増やすとしましょうか。さ～て次はどこに遊びに行こうかしら～♪」

そして少女は頭上に現れた対極図のような魔方陣に吸い込まれるように消えていった。その様子を見ていたものは誰もいない。

――

香霖堂の前に四人は集まっていた。危機を退けた彼らの顔は安堵と疲労が入り混じった表情をしている。だが店主だけは違った。彼は地面で体育座りをするようにしゃがみ込み悲しみを爆発させている。そんな霖之助に魔理沙とトニーは声をかけた。

「いや～まさかこっちに逃げてくるなんて予想外だったぜ。泣くなよ香霖」

「すまないリンノスケ。まさかこんな事になるとは」

香霖堂の正面玄関は最後のドローン撃破の爆風で悲惨な光景になっていた。入り口の扉はひしゃげ穴が開き、軒先に飾ってある看板は黒焦げとなり、さらに店の外に置かれていた道具は爆風でめちゃくちゃな状態だ。

「もう二度と手に入らないかもしれない物もあったのに・・・ひどすぎる！僕が何をしたっていうのさ！！」

体育座りから突然立ち上がり、霖之助は狂ったように意味不明なジェスチャーを繰り返している。その形容しがたい動きに三人は背

を向けひそひそと会話した。

「彼はいつもあんなエキセントリックな怒り方をするのか？」

「ありゃ相当やばいな。昔ちょっとした出来心で大切にしてた熊の置物を、本で見たパンダとかいう生き物に改造した時もあんな動きしてたぜ。そのときは二週間くらい口も聞いてもらえなかった。ちゃんと熊に戻したのに・・・・・・」

「魔理沙もかなりエキセントリックだよね。問題はそこじゃないと思うよ」

「結局どうすればいいんだ。彼とは付き合いが長いんだろう？」

「・・・じゃあ説得してみるよ」

魔理沙はやれやれという仕草をしてから動きをエスカレートさせる店主の背後にすばやく回りこんだ。

「香霖機嫌直せよ・・・ほら！」

「あべし！！」

首筋にきれいなチョップが入り霖之助は地面に沈んだ。

「「物理的な説得かよ！！」」

ツッコミを入れる二人を無視し、よし！と何かをやり遂げたように魔理沙はガッツポーズを決める。

「私は一足先に霊夢のとこにいって状況を確認してくる。香霖は起きたら元に戻ってるはずだから、博麗神社まであんたを案内するように伝えてくれ。じゃあ嫌な感じがするから急ぐぜ」

彼女はそう言い残し逃げるように飛んでいってしまった。残された二人はなんともいえない表情で立っている。

「さて一応問題は解決したが、博麗神社というのは何なんだ？そこに行けば何かあるのか？」

「ああ、トニーは外の人だったね。簡単に説明すると博麗神社は外の世界と繋がってる場所で巫女の霊夢が管理してるんだよ。まあ管理といっていいかは微妙だけど」

外の世界に通じる場所。それはつまり、

「そこに行けば元の世界に帰れるというわけか」

「ご名答。外から迷い込んだ人間は大抵そこから帰るようになってるんだ。とりあえず行くのは店主が起きてからだけどね」

霖之助が言っていた打開策とはこの事だったのだろう。元の世界に帰る方法は見つかった。しかしトニーはすぐに帰ることはできないと思う。

それはさきほどの襲撃者達の存在だ。倒したドローンや異質なあのメカはＡＩの暴走で動いているようには見えず、明確にこちらを狙ってきていた。おそらく誰かが差し向けたものだろう。それと撃破したドローンの破片の消え方も気にかかる。さらに残っているであろうパワードスーツの行方も探さなくてはいけない。

まったく忙しくなりそうだ。そんなことを考えつつトニーはバラバラになったＭｋ－？の装甲を拾い上げた。

「そうだな。リンノスケが起きるまでとりあえずこいつを修理しよう。手伝ってくれるか、ニトリ？」

「もちろん！聞きたいところもあったしね」

それはカミナが大妖精達と出会った直後の出来事であった。
この後博麗神社へと向った彼らに待ち受ける巫女との出会いはこの世界に何をもたらすのだろう。
そして新たな客人達が幻想郷へ招かれ、物語の歯車は再び回りだす。黒い観客に見守られながら・・・・・。

――

カミナとトニーが博麗神社へ向かったその頃、妖怪の山でさまよう怪しい影が二つ。果たして彼らの正体は？
次回、『忍者、飛ばされるの巻』

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その3（後書き）

アイアンマンは今回で終了です。本来ですと二回で終わらせたかったのですが、長くなりすぎたので三分割になってしまいました。手軽に読めてサクサク進む文章が理想ですがまだまだ未熟で恥ずかしい限りです。
それでは次回。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1

「おいサスケ、なんか楽しい話でもしろよ」

「またですか音速丸さん。では僕が海老川デザインなリアルロボット系に乗って、囁く声が聞こえる行動的な美少女といい関係になりつつ世界を救ってラブ＆ピースな話の続きをしましょう」

その二人は妖怪の山ではまず見ない格好をしていた。サスケと呼ばれた男は全身黒の忍者装束姿で、もう一人の音速丸と呼ばれた生物は羽が生えた丸く黄色い姿をしている。

「バカ！長いんだよ！それにその話は今日三回は聞いたぞ。いい加減別の話をしやがれ、このスカポンタン！！」

「大声あげなくたっていいじゃないですか！あの話しはまだまだ続きがあるんです！音速丸さんこそ海産物系の名前の家族の婿と、毒にも薬にもならない会社生活を送る夢はもうウンザリだって、今日五回以上は言ってますよ！」

二人はイライラしているようで会話に穏やかさは一切ない。声から分かるのは苛立ちと疲れだった。

「飛び過ぎて頭が回らねーんだよ！大体ここはどこの山奥だ！こんな馬鹿でかい滝は忍者学園の近くにはねえぞ！！」

「知りませんよ！気がついたら山にいて音速丸さんしか周りにいないし、忍ちゃんもほかのみんなもまったく見あたらないし・・・最初は何かの罰ゲームかいたずらかと思いましたが私ら間違いなく遭

難してますよね？」

まさにその通りであった。現在彼らは妖怪も入らないような山道の崖をひたすらに迷っている。どうしてこうなったのかまったく見当もつかない。

目が覚めたとき彼らは忍者学園の自室ではなく何処とも知れぬ森の中にいた。行き先も分からず二人は歩き続け、疲労は限界寸前だ。

「そ、そんなわけあるかよ。適当にハイキングしてればどっかに出るもんね！いくぞオラッ！！」

やけになっているのか音速丸は適当に林に突っ込んだ。その後をサスケは追う。

「置いてかないで下さいよ！ってうわあああああ！！！」

草と木で見えづらくなっていたそこは崖だった。

二人は落ちる。音速丸は本来羽で飛べるのだが落ちる瞬間サスケが体を掴んだ為、一緒に崖下に真っ逆さまだ。

「離せよ手前ェ！まだ死にたくな～い！！」

「旅は道連れ世は情けっていうじゃないですか！！一人で落ちるのはイヤ――――――――！！！」

走馬灯が脳裏をよぎりもう駄目かと思った瞬間、二人の体に衝撃と水の感触がきた。一瞬気が遠くなるがすぐに現実へと引き戻される。

聞こえたのは悲鳴、それも女性達の声だった。

「キャ――――――――！」

「変態よ！変態――――――！」
「誰か――――――――――――！」

サスケと音速丸が水面から立ち上がると目の前に三人の女性がいた。彼女達は全裸でどう見ても警戒した面持ちでこちらを睨んでいる。

二人は頭を回転させた。

・山で迷って崖から落ちたがすぐ下が水浴び場だったようで助かった。
・しかし人がいたようで水浴びしていた目の前の女性達はほぼ裸。
・彼女達はこちらの事情は知らない。ストレートに状況を見てどう思うか。
・つまり自分達は天空の城のヒロインというより、覗きをしていて落ちてきた変態・・・　↑今はここ！

「どわー！間違いです！変態じゃないです！事故です！事故！！」

サスケはあたふたと手を振り必死に叫んだ。しかし逆に怪しく見える。

「その通りさ、レディー達。怖がることはない。全然僕ら怪しくないし３Ｄ世代だし勘違いしてもらっては困る」

冷静そうに振舞う音速丸も微妙なことを口走りあきらかに動揺している。

「何事だ！？」

挙動不審な二人は声のする方を見た。そこに立っていたのは一人、

全体的に白い格好をした少女だ。

「悲鳴が聞こえたので駆けつけてみたが、貴様らどこの所属だ。返答次第ではこの場で叩き切るぞ」

凛々しい声でこちらを威嚇するように睨む彼女の姿を見て両名は歓喜の涙を流し抱き合った。

「お、音速丸さん犬耳ですよ！犬耳！しかも盾と剣装備で完全に騎士やら剣士じゃないですか！ここはもしやファンタジーなとこなんじゃないのでしょうか！ていうか夢！？」

「よく見れば羽とか尻尾とかなんか夢のようなオプションが他の彼女達にもついてるじゃありませんか！サスケ、どうやら俺達はついにあっち側の世界に来てしまったようだな！ありがとう神様！！！！」

テンションが最高まで上がったバカ二人は、頭から現在おかれている状況が完全に抜けてしまっていた。そんな彼らを哀れむように一瞥し白い剣士は言った。

「・・・言葉が通じんようだ。遠慮なくいくぞ」

「え？」
「ん～？」

言うまでもなく二人はお縄になった。

――――――――――――――――――――――――――

同時刻：守矢神社前

「音速丸とサスケさんは大丈夫かな・・・」

ピンクの忍者装束に赤い大きなリボンが印象的な格好の少女は、腰より長い黒髪を揺らし一人空を見上げた。その表情からは不安がうかがえる。

「あんまり心配しすぎると、忍さんが大丈夫じゃなくなってしまいますよ。それに仲間の方達はきっと大丈夫です」

「あっ、早苗さん」

忍と呼ばれた少女の背後に守矢の巫女『東風谷早苗（こちやさなえ）』は立っていた。

「そろそろ夕飯なので、皆さんに声をかけに大広間に行ったんですが、忍さんだけ姿が見当らなかったものですから探しにきました」

「すいません。何から何まで面倒をかけてしまって」

「いえいえ状況が状況なので気にしないで下さい。それにうちの神様は、どちらも賑やかなのは好きですから問題ないですよ。じゃあ行きましょう」

それを聞いて忍の表情は少し明るくなる。

「はい。何か手伝うことがあれば遠慮なく言ってください」

二人は神社に隣接した家に向かった。空は赤く染まりつつある。
早苗は足を進めながら今日の出来事を思い返していた。
あれは昼前、日課である境内の掃除をしていたときの事だ。
突然目の前の空間が歪み、そこから裂けるようにスキマが広がった。そして一瞬のうちに二十人ほどの人影が現れスキマは閉じた。
現れた人間のほとんどが黒い忍者の格好をしており全員が寝ている。
驚いた早苗はとりあえずその集団の中に一人だけいたピンクの少女を起こして聞いた。

「すいませんがどちら様でしょう？」

「はひ・・・あれ明るい・・・んん・・」

問われた少女は寝ぼけていたが、すぐに辺りを見回し姿勢を正すと慌てた様子で早苗を見た。

「あの、その、気分はぐるぐる・・・じゃなくて、ええといつの間に昼に！と、とにかく私は忍者見習いの忍です！というかここはどこなのでしょうか！？」

混乱する彼女をなだめ、他の忍者達を起こして幻想郷について簡単な説明をしていると神奈子と諏訪子がやってきた。二人は驚くかと思いきや、いたって冷静に状況を聞き忍達に言った。

「とりあえず飯にしよう。まあすぐ出せるのは粥ぐらいだが。腹減ってるだろ、お前達」
「そうだね。じゃあ大広間に行こうか。早苗準備お願い」

その後昼食をとり、一息ついたところで神奈子は忍達に聞いた。

「誰か八雲紫って女から何か聞いてないかい？」

その言葉に反応したのは忍だけだった。

「あの怪しい人は力を貸してほしいと言ってました。でも私、『見習い忍者じゃ力不足ですよ』って返したんです。そしたら大丈夫って言われて目が覚めたらここに・・・」

それを聞いて神奈子はなんともいえない表情をしていたが、となりの諏訪子は、

「まあ、しばらくはここにいてもらおうか。なんか仲間もほかにいるようだしさ」

そういってケロケロと笑っている。

よく分からないが二人は何かを前もって知っていたようだ。それがどういうことかは分からない。しかし八雲紫が関っているとなると厄介ごとであるのは明白だ。あの妖怪が絡んでくると大体ろくなことにならない。

早苗は二人にことの詳細を聞こうとしたが教えてはもらえなかった。

「とりあえず今はなんともいえないね。それより、忍の仲間が足りないってのが気になる」

「確かに。あの妖怪は人攫いでミスとかはしないはずだしね」

忍達がいうには仲間の何人かが見当らないという。名前があがったのは二人、音速丸とサスケという人物だった。サスケは他の忍者と同じ格好だが、音速丸という人物（？）はそこらへんの妖怪より奇怪な姿をしているらしい。他にも何人かいないとのことだが、基

本的に皆同じ格好のせいで本人達でも正確な数は把握できていないようだった。

「無事ならいいんですが、この世界は妖怪とかがいるんですよね。食べられたりしていなければいいのですが・・・」

忍は不安そうに言う。ここは妖怪の山だ。そういう事態になっていることも否定できない。それを聞いて周りの忍者も戸惑いや不安を口にした。

「もう胃の中かも・・・南無三」

「貸してたエロゲ返してもらえるかな。まだサブキャラクリアしてないんだよな」

「俺、はじめて神様見たよ！ラッキー」

「神奈子様だろ！普通！」

「需要は諏訪子様のほうが圧倒的だ！」

「おいおいお前等、断然早苗ちゃんだろ。異論は認めない！」

・・・根本的に違うことを言っている忍者もいるが早苗は無視した。

とりあえず行方不明の人達の件は山の警備担当の天狗に伝えておくべきだろう。その他にもやらなければいけない仕事もある。

そして雑務をこなし、気がつけば夕方になっていた。そこで記憶は今に戻る。

彼女と仲間達がどうして八雲紫に呼ばれたかは分からない。しかし早苗は穏便にことが終わるようには思えなかった。それはさきほど見た天狗の新聞のせいだろう。そこに書かれていたのは、最近の幻想郷で相次ぐ小規模な異変と目撃される怪異の記事だ。それらと今回の件は無関係には思えない。

何かが起こっている。それもゆっくりと確実に・・・。

「どうしたんですか早苗さん？」

はっとして隣に目をやると、忍がこちらを不思議そうに見ていた。どうやら考え込んでしまっていたようだ。

「いえ何でもありません。みなさんを待たせても悪いですから急ぎましょうか」

「はい！」

二人は駆けていった。夕日はさらに赤を増し、その色はまるで血のようだ。

そして二人を見送るように、一つの影が先ほど忍がいた場所に立っていた。

「・・・・・・」

無言の影は黒い少女だった。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1（後書き）

今回からシノブ伝の章に入ります。原作は終了しておりアニメにもなった作品です。
作品については次話で。
しかしもっとペースをあげたいですもの。
それでは次回・・・。

♯．３　『忍者、飛ばされるの巻』　その２（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

・♯．３『忍者、飛ばされるの巻』その１からの続きです。先にそちらを読むことをお勧めします。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その2

「こんばんわ、忍者のお嬢さん。ちょっと話があるんだけど」

「へ！？」

夕飯の片付けをしていた忍が後ろを向くと、そこには女性が一人立っていた。見たところ二十代後半というところの女性はにこにこしながらこちらを見ている。不審に思ったがとりあえず忍は聞いた。

「あの、どういったお話でしょうか」

「私は八雲紫。あなたに簡単な人助けの手伝いをお願いしたいの。仲間と一緒にね」

突然だと思う。しかも自分だけでなくクラスメイトも必要らしい。

「みなさんに聞いてみないと答えられません。あと見習いの忍者ではお役に立てないと思いますよ。プロの方に相談してみてはどうでしょうか？」

「大丈夫よ。期待してるのは質より量だし問題ないわ。それにあなた達にしかできないこともあるのよ。それじゃあ行きましょう」

「えっ！な、何ですかコレ！吸い込まれる！？」

忍はスキマに呑み込まれ、そこで意識は闇に沈んだ。だが忍はその後何かを見た気がする。

黒く赤く、そして優しい、とても冷たい微笑を。

「・・・ぶさん、忍さん。朝ですよ。起きてください」

気がつけば目の前に早苗がいる。どうやら昨日の夢を見ていたようだ。

「あ、おはようございます」

しかしこれは現実なのだろうかと忍は思う。早苗から聞いた幻想郷というこの世界は、妖怪も神様も存在する御伽話のような場所だ。最初は冗談かと思ったが二人の神様が出てきて、飛んだりお粥を出したりしたのを見て深く考えるのはやめた。

「ここでは常識に囚われていては生きていけません」

そんな昨日の早苗の言葉を思い出す・・・郷に入れば郷に従えということだろうか。

「朝ごはんの支度を手伝ってもらえますか。さすがに三食お粥では皆さん飽きてしまいますからね、うちの神様も食事にはうるさいんですよ。ほかに楽しみもありませんし」

「もちろんです。着替えたらすぐにお手伝いします」

とりあえず前向きに考えよう。自分の取り柄は元気と健康なのだから。

そして忍は朝日を見て思う。今日はどんな一日になるだろうかと・・・。

「起きろ変態ども」

鉄格子が開かれ、音速丸とサスケは座敷牢から別の部屋へと連れていかれる。

昨日崖から落ち天狗の水浴び場にダイブしてしまった彼らは、あの後椛と水浴び場にいた天狗達に袋叩きにされ、気を失い牢に放り込まれていた。しかしその時の顔は終始幸福そうで周りにいた誰もが気味悪がった。ちなみに今もそうだ。

「これから貴様等を尋問する。正直に答えたほうが身のためだぞ」

二人が入ったその部屋は、殺風景で机と椅子が置いてあるだけだった。しかし気になることが一つある。それは壁や床についている何かの跡だ。それは赤黒い色で壁と床をびっしりと埋めている

「すいません。聞きたいんですけど、あの壁に付いてる染みとか文字はなんでしょう」

先ほどまでにやけていたサスケは壁に染み付いた無数の跡を見て不安そうに聞いた。椛は平然と答える。

「あれは口が堅かった連中が最後に残した遺書みたいなものだ。声にならない断末魔ともいうが」

一瞬で空気も心も凍りついた。どうやらここは夢というより悪夢のほうが正しい世界のようだ。

「サ、サスケなんかヤバイぞ、これ！」

「もう僕等、終わりなんじゃないんでしょうか・・・いやだ！死にたくない！」

二人は縄で縛られた手で頭を抱え泣き出しだした。椛は鬱陶しいと思いつつ告げた。

「まったく賑やかな変態達だ。別に拷問してどうこうする気はない。既に貴様等の情報は守矢神社から回ってきているのでな。こちらの質問に答えれば仲間のところに案内してやる。私は『犬走椛（いぬばしりもみじ）』、警護隊の一人だ」

そして二人は椛から、自分達の身元と幻想郷に飛ばされた経緯を聞かれた。

音速丸達はありのままを説明しこの世界について色々質問した後、納得したように椛に言った。

「つまり、この幻想郷って場所はとんでもないパラダイスで間違いないってわけだ。やっぱりありがとう神様！！」

「本当ですね。てっきり僕は、拷問されて生贄か何かにされるのと思いましたよ音速丸さん！それに忍ちゃん達もいるみたいですから安心しました！」

やはり鬱陶しい。聞けるだけの情報は聞いたようなので、さっさと二人を守矢神社に引渡したほうがいいだろう。また何か起こされても困るし。そう椛が思っていると取り調べ室のドアが突然開いた。入ってきたのは椛より少し背の低いカメラを下げた少女だ。

「やっと見つけた。探すのに意外と手間取ってしまいました」

「はっ！エンジェルがまた一人！」

「羽生えてますしね、黒いですけど」

椛を見ればいやそうな顔をしているが、そんなことはお構いなしにその少女は続ける。

「早速ですけど質問させてもらいますよ。名前と職業をお願いします」

彼女は椛の上司らしく『射命丸文(しゃめいまるあや)』と名乗った。そしてメモを取りつつ、二人に様々な質問をし時折写真を撮った。しばらくして文は部屋を出て行く。

「さて、これから私は博麗神社へ取材に行きます。なんでもあそこにも、面白い外の人間が来てるらしいですから。それでは機会があればどこかで」

疾風のような人物だと二人は思う。椛はため息をついた。

「やっといったか。まったく困った人だ」

「あんたの上司なんだろ。苦手なのか？」

音速丸に言われ椛は答える。

「とくに嫌っているわけでない。ただもう少し真面目にしていてほしい。ああ見えても立場がある人だ」

遠い目をしている彼女にサスケは声をかける。なんとなく気持ちが分かる気がした。それは自分も、忍者学園頭領である音速丸との上下関係で、たまにウンザリするときがあったからだろう。

「なかなか大変ですね。天狗の世界も」

その言葉の響きは同情というより気遣いだった。

「すまん、忘れてくれ。それより仲間のところに約束した通り案内しよう」

そして二人は守矢神社に椛と向かう。時間はあっという間に正午を過ぎていた。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その2（後書き）

シノブ伝の二回目になります。
アニメ版シノブ伝は今見ると声優が豪華です。忍からして水樹奈々さんですし、音速丸は若本規夫さん、サスケは関智一さん、さらに役名は省略しますが、川澄綾子さん、釘宮理恵さん、小野大輔さん等、現在も一線で活躍している声優が揃っていました。
内容に関しても、早すぎたギャグアニメといわれることもあり、もう少し後の時代に放送されていれば第二期なんかもあったはずです。
というかやらないかな第二期・・・。
とりあえず次回に続きます。

♯．３　『忍者、飛ばされるの巻』　その３（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

・♯．３『忍者、飛ばされるの巻』その２からの続きです。先にそちらを読むことをお勧めします。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その3

「・・・ということがありまして、この二人は昨日話が回ってきた連中のようでしたから、こちらに引き渡しにきました」

守矢神社の門の前で早苗と椛は話していた。椛の後ろには音速丸とサスケが立っている。

「ご苦労様でした。これ警護隊のみなさんで召し上がってください」

早苗から差し出された大きな包みを受け取り、椛は頭を下げた。

「いつもかたじけない。それでは失礼します。サスケに音速丸、あまり守矢の方々に迷惑をかけるなよ。それと貴様達の話は面白かった」

そのときの椛の顔はにこやかで二人は初めて彼女の笑顔を見た気がした。道中他愛もない会話をしながら三人は山を登ってきたが、終始彼女は固い口調で事務的だった。

おそらく彼女は職務に忠実すぎるのだろう。自分勝手な上司が苦手なのもその為に思える。

「大きなお世話でい！・・・道案内感謝するぜ、ありがとよ」

「お世話になりました椛さん！」

二人は手を振り白い剣士を見送った。そして後ろの巫女へ振り向く。

「あなたが守矢神社の方ですか？」

「話題のハンサムボーイ、音速丸です！」

「話の通り元気な方々のようですね。私は巫女の東風谷早苗と申します。お二人のことは皆さんから聞きました」

その言葉を合図のようにして、門の影から見慣れた仲間達がぞろぞろと現れ二人を取り囲んだ。

「音速丸もサスケさんも無事で本当によかった。二人が見当らないから、怖い妖怪に食べられてもう消化されてるんじゃないかと思って心配してたのよ」

忍は泣きそうな顔で二人を見た。そして周りの忍者達も一斉に口を開いた。

「まさか覗きで捕まってたなんてね・・・」

「最低です！」

「見損ないました！」

「ゲーム返してください」

「ていうか先ほどの犬耳の美少女は誰ですか？」

矢継ぎ早に忍者達から言葉が浴びせられ音速丸とサスケは否定の声をあげる。

「誤解だ！覗きなんてするわけないだろ！あれは何者かが俺達を陥れるために計画した罠だ！なあ、サスケ！？」

慌てた音速丸は奇妙な動作でサスケに同意を求めた。サスケは大

げさなポーズを取り叫ぶ。

「その通り！信じてくれよみんな！僕達は楽園を垣間見ただけでいやらしい感情なんて微塵もなかったんだ！・・・でもあの娘達はまさに天使でしたね」

激しい動きから一転し、何かを思い出すようにサスケも奇妙な動作をはじめる。

「まったくだ。なんていうか…その…下品なんですが…フフ…オッパッちゃいましてね…Ｉ　ＬＯＶＥ　おっぱーい！！」

その二人の様子に周囲は呆れているようで罵声が飛んだ。

「やっぱり最低だ！」

「あんたら、ほんとに妖怪に食われちゃえばよかったのに！」

「このエッチメン！」

「ちなみにどこまで見たんですか！」

そんな調子で騒いでいると二神がやってきた。

「ったく騒がしいね。なんか黄色い妖怪もいるし」

「あれは忍達の仲間だよ。昨日聞いたじゃない。それにしても楽しそうだな、おい」

対照的な態度の二神を見て音速丸は忍に耳打ちする。

「あいつら何様？それとどういう状況だ？手短に説明してみろや忍」

「ええと～斯々然々で・・・」

音速丸の耳元で忍はごにょごにょと何かを言った。それに対して音速丸はしばし考え、ポンッと手を叩いた。

「なるほどそういうわけか。つまり俺が幻想郷を救ってラブ&ピース！」

声高々に叫ぶ音速丸に周りが沈黙し、哀しそうな視線が突き刺さる中、神奈子は笑顔で彼につっこんだ。

「そこの黄色いの、あんた頭は大丈夫かい。神様でもそういう病気は治せないよ？」

「何だと！神様だからって偉そうにしやがって～！男は怒るときは怒らねばならないのだ！たとえ相手が強大な力を持つ正義だったとしても！！」

音速丸は勢いのままに神へ突撃した。

「さっきから鬱陶しいね。少し黙ってな」

黄色い球体が目の前に迫る瞬間、神奈子は右手を上に振る。その刹那、音速丸の真下から？御柱？が出現し股間にクリーンヒットする形になった。

「うひは～！お、俺のメルヘンスティックが！これが八坂の力か…ぐふっ」

股間を押さえ彼は地面で動かなくなった。やれやれとまたかと周囲が思っていると、神は視線を別の方向に向けた。

「一人は静かになったか。でももう一人気になるのがいるんだよな」
神奈子が見たのは忍達が立つ門の外側、山道に下りる階段の辺りだ。そこにはサスケが自身を指差し立っている。
「え？僕ですか。ちょっと待ってくださいよ！御柱なんて受けたら僕もエクステンドしちゃいますよ！信仰が足りませんでしたか！？」
「あんたじゃないよ、下がってな」
言われてサスケはそこからどいた。神奈子の視線はそのまま何もない場所に向けられている。
「うまく隠れたつもりなんだろうけど、出てきたらどうなんだい？」
しかし返答はない。そして諏訪子もそこに向けて口を開く。
「なんだ神奈子も気づいてたんだ。まあ案外分かりやすかったしね。見えてるというより、見せてるが正しいのかな」
どういうことかと早苗も忍達もその何もない空間を凝視した。やはり返答もなければ変化もない。しばらくして神は痺れを切らし、強い口調で言った。
「出てこないなら実力行使させてもらうよ」
先ほどのように神奈子は右手を動かした。すると無数の御柱が一斉に現れ視線が集まる空間に叩き込まれた。
通常であれば御柱同士が激突し木材の破砕音がするはずだが、御

柱はぶつかることなく一瞬で細切れになり地面に落ちた。その光景に二神以外はただ唖然とするほかない。

「怖いね～。やだやだ」

今度は諏訪子がどこからともなく取り出した鉄の輪をそこに投げつけた。輪は高速で回転し、その場にいた者たちの視界から消える。

直後、何もなかった空間に光で描かれたような対極図が出現し、そこから人が現れた。光のせいで影しか見えないがそのシルエットは女性のもので、手には刀のようなものと先ほどの輪が握られている。対極図は一瞬強い光を発して消えた。

そして現れた人物の姿を見て全員が驚愕の声を上げる。

「あれってまさか！？」
「どういうことなんだ！」
「ええー！」
「？？？？？」

皆が混乱する中、最もショックを受けていたのは忍だった。彼女は顔に手を当て、確かめるように目の前の人物を見た。

「・・・私がもう一人」

対極図から出てきた人物、それは服装と肌の色こそ違うが忍と瓜二つの少女だった。その肌は褐色に近く、全身は黒を基調とした巫女風の服に包まれ、腰の後ろには刀の鞘が下げられている。髪は後ろで一つにまとめられ、忍より短く色も同じだがリボンと鉢巻は身に着けられてはいない。

少女は手に持った輪を投げ捨てると刀を収め二神を見た。

「さすがは神か・・・ここで争うつもりはない。私はそこの異邦人達を監視していただけだ」
「監視？一体何の為にさ」
「答える必要はない」
　少女は冷たく諏訪子に言い放ち、忍達へと視線を移した。
「必要以上に幻想郷に関るな、今すぐ元の世界に帰れ。さもなくば貴様達に明日はない」
　その目から感じられるのは拒絶という感情だった。睨まれた忍達は威圧感で、喋ることも動くこともできず、ただ少女を見つめ返している。
「物騒な物言いだが何者だい？そこのくノ一と同じ面のようだけど」
　空気を変えたのは神奈子だった。彼女は腕を組み黒い忍をじっと見つめた。しかし答えは同じだ。
「答える必要はないと言ったはずだ…警告は確かにした。すぐに立ち去れ、二度目はない」
　念を押すようにそういうと黒い忍は後方へと跳躍し、そのまま落ちるように石段へ消えた。
　早苗と忍は急いで階段の下を見たがそこには影も形もなかった。

――――――――――――――――――――

守矢神社の遥か上空では赤と黒の少女が忍達を見下ろしていた。その表情は愉快そうであったが、何か考えているようにも見える。

「う～ん・・・おかしいわね。あの優しいくノ一さんのコピーは失敗したはずなんだけどな～。しかもなんか自分勝手に行動してるみたいだし、どういうことかしら？」

しばらく考えていた彼女だが、すぐに飽きてしまったようでため息を吐いた。

「難しいのは嫌いなのよね。やっぱりシンプルが一番！うんうん」

何かに一人納得し、彼女は妖怪の山の向こう側へ視線をやった。

「あっちのお友達は元気にやってるかしら」

妖怪の山の裏側には三途の川が流れている。しかし彼女が見ていたのはその中間にある通り道のほうだ。

「まあ気が向いたら見に行くとしましょう。さてそろそろ帰ろうかしら、また誰か来るかもしれないし・・・次はお友達も連れていくからね、忍者さん達♪」

そして少女は対極図に酷似した魔方陣へ消えた。その存在に気づくものはいないはずだった。

しかし地上では一人空を見上げる人影がある。それはあの黒い忍だ。

「やはりか。必ず殺す、彼らのためにも必ず…」

彼女は憎しみの目で虚空を睨み続けた。

――――――――――――――――――――――――――

「つまり、俺が何度目かの生死の境をさまよっていた間にデンジャラスでクールなブラック忍が独壇場ってわけだ」

「要約するとそんな感じでしょうか。しかし何者なんでしょうね」

黒い忍が去った後、気を失った音速丸は目覚め状況をサスケから聞いた。全員が沈黙し、忍は下をうつむいている。深刻そうな周りの表情を見て音速丸は不思議議そうに言った。

「お前等何を悩むことがある。その忍の正体は既に割れてるだろ」

「ええ――――――――――――――！！！」

その場の全員が声を合わせて叫んだ。

「ハンサムボーイ、どういうことかケロちゃん達に教えてくれるかね？」

諏訪子が聞くと音速丸は一息して告げた。

「そいつはおそらく、アニメ版ＯＰで出てきた黒い忍の成れの果てに違いない。出番もないから幻想入りしたんだろ。で、本物が迷い

込んできたから、慌てて自己顕示欲にまかせて登場したと」

それを聞いて忍者達はおおと歓声をあげる。忍も音速丸を抱きしめ嬉しそうにはしゃいだ。

「盲点だったわ！さすが音速丸！」

「ああ、確かにＯＰで出てましたよね！」

「そうそう目立ってたけど本編未登場」

「そのせいで詐欺ＯＰでたまに名前が挙がるしな」

「あんた最高にＣｏｏｌだよ！」

そんなテンションが高い彼らを尻目に守矢神社の巫女と二神は頭を抱えた。

「神奈子、予想以上におめでたい頭の連中だよ。あれ」

「早苗、あいつらが何を言っているのか分からないんだけど、どういうことだい？」

「すいません、私も理解しかねます」

苦笑いする早苗にやれやれという様子で諏訪子は言った。

「まあいいや。それより、忍達を連れて博麗神社に行ってきな」

「霊夢さんのところへですか？」

「そうそう。思ったより厄介なことになってるようだから。ちょっと情報収集も兼ねてさ」

神奈子も続けて早苗に言う。

「数日前にあのスキマ妖怪がわざわざ顔を出しに来たんだ。近々幻想郷全体が騒がしくなるかもしれないとね。最近なにかと変な噂も耳にするし、おそらく今回の件もその一つなんだろうよ」

やはりあの妖怪の名前が出た。

「とりあえず今日はもう時間がないから明日の朝に出発しな。これからどうなるか分からないし、あいつらも一日くらいぐっすり眠らせてやったほうがいいだろう」

「はい・・・」

早苗は思う。これからどうなるか分からない、それは確かだろう。彼らは迷い込んできたわけではなく、こちらに招かれた存在だ。おそらくただでは帰れない。そんな気がする。だが彼らを見て早苗は言うしかなかった。

「みなさん、明日になったら博麗神社という別の場所に行きましょう。そこは外の世界と幻想郷が繋がる場所です。もしかしたら帰れるかもしれません」

その言葉に忍達は安堵の声を口にした。

「本当ですか！これで楓さんと雅ちゃんに会える！」
「おいおい、これから大冒険地獄偏じゃねーのかよ！」
「音速丸さん、残ってていいですよ」
「帰ったら録画してた番組見ないとね」
「ネットできないから禁断症状が出そうだよ、俺」

忍は誰かの名前を嬉しそうに言い、音速丸はサスケと口論を始め、ほかの忍者もそれぞれ何かを話している。その様子に胸の辺りが痛む気がする。

――――――――嘘をついてしまいました――――――――

そして翌朝、早苗と忍達は博麗神社へと向かうため山を降りた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

早苗と忍者学園一行が守矢神社から旅立った頃、
妖怪の山の裏、三途の川に小舟が一艘。乗るのは死神と異界の探偵。

次回、『蘇えるS／地獄への行き方』

#. 3 『忍者、飛ばされるの巻』 その3（後書き）

シノブ伝の終わりの章になります。意外と長くなってしまいました。
反省です。
次話から『仮面の探偵』に話しが移ります。
それでは次回・・・。

#. 4　『蘇えるS／地獄への行き方』　（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 4　『蘇えるS／地獄への行き方』

「…てわけでさ、あたいは言ってやったんだよ。『無理ですよ、だってもう数え切れないくらい釜茹でされて来世まで再起不能になってる頃ですよ、あの罪人』ってね」

三途の川を渡る小舟の中で、死神『小野塚小町（おのづかこまち）』は得意げに先日の出来事を話していた。

舟の乗客は壮年の男で、白い帽子に白いスーツ姿という幻想郷では珍しい格好をしている。彼はただじっと小町の話しに耳を傾けていた。

「そしたらすごい剣幕で閻魔様が怒って、『次にそういうことがあれば減給処分だけではすまされませんよ』って言われちゃったわけだ。誰にでも失敗くらいあるのにさ」

話に一区切りが付いたところで男は口を開いた。

「…どう聞いてもお嬢さんが悪いと思うがな」

その感想に小町は耳が痛いというふうに答えるが、途中でおかしなことに気づいた。

「まあ、その通りなんだけど、あの閻魔はもう少し部下を…ちょいと待った。なんで旦那は口がきけるのさ？死人に口無しっていうだろ」

幽霊となりここに来た人間は、閻魔が許可を出さない限り基本的に言葉を話すことができない。しかし男は確かに声を出し、自分の

愚痴に感想を述べた。怪訝な顔の死神に男は言う。

「そういうものか。生憎死んだのは初めてでな、勝手が分からん」

いやいやと手を振り小町は語る。

「？死？っていうものは一回きりなんだから、二回目も三回目もありゃしないよ、地獄送りになれば別だけどさ。それと旦那はどっから来たんだい？」

「風都からだ。何か問題でもあるのか」

「旦那がいた船着場は幻想郷で死んだ人間が来る場所なのさ。だから幻想郷以外で死んだ人間は間違ってもあそこには来れない。それに聞いたことのない名前の場所だ」

通常人が死ぬとその魂はそれぞれの世界の彼岸行きの船着場に辿り着くようになっている。だがこの男は知らない場所から来たと言った。小町はどうしたものかと悩んだが答えは一つしかない

「こうなりゃ映姫様に聞くしかないか。んん～、でもまた怒られそうだな。そういや旦那、名前は？」

問われた男は死神の少女に告げた。

「鳴海荘吉（なるみそうきち）。おそらく地獄行きになる罪人だ」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「では小町、あなたはその男を乗せるとき疑問を感じたり不審に思ったりはしなかったわけですね」

「おっしゃる通りです」

彼岸に着いた荘吉は小町に連れられ、是非曲直庁（ぜひきょくちょくちょう）の管理する裁判所内の一室にいた。そこは幻想郷担当の閻魔の執務室だ。

そこに入って荘吉は声にこそ出さなかったが少し驚いた。想像していた閻魔と部屋にいた閻魔はあまりにもギャップがあったのだ。目の前の閻魔は十代の少女そのもので小町よりも幼く見える。またその外見に反して相当な年齢らしく幻想郷の死者は全て彼女が裁いてきたと小町は教えてくれた。

そして今この可愛らしい閻魔は怒っていた。

「まったく！仕事に対する緊張感が足りないからいつも何かしらのミスやトラブルを起こすんです。常日頃から責任感をもって生活していれば、あなたは今頃もっと上の役職になれるんですよ。そもそも…」

小町が事情を説明してからこの閻魔はしばらく彼女を叱責していた。そこから窺えるのは、この死神がなかなかに問題児らしいということだった。舟での会話を思い出せば納得できると荘吉は思う。

「映姫様。今はあたいの勤務態度についての話じゃないと思うんですがね」

話しが進まないうえに、自分に対しての説教が長引いてきたので小町は荘吉に目をやりつつ上司を見た。

「そんなことは分かっています。この話の続きは後でしますから覚

悟しておくように」

「へいへい」

軽い調子の返事を聞きながら閻魔は荘吉の方に視線を移した。

「さて、鳴海荘吉といいましたね。私は幻想郷を担当する閻魔の『四季映姫（しきえいき）・ヤマザナドゥ』というものです。あなたはどうしてあの船着場にいたのですか？詳しく教えてください」

映姫に問われ彼は困ったような顔をした。

「詳しくか…そういわれても返答に困るな。俺は胡散臭い女から、あの場所にいれば地獄行きの舟に乗れると聞いて待っていただけで他のことは一切知らされていない」

ふむと頷き映姫は続ける。

「では、その胡散臭い女とは誰ですか？」

荘吉は困った顔のままだ。

「それも分からない。聞く前に突然消えた。まるで隙間に吸い込まれるようにな」

「？スキマ？ですか。厄介そうですね」

しばらく無言で考えていた映姫は咳払いをして部下の名を呼んだ。

「小町、しばらく席を外してもらえますか。終わったら呼びにいき

ますので休憩所にいてください」

「分かりました。じゃあ旦那、また後で」

「ああ。後でな」

小町が部屋を出て行くと部屋の鍵が閉められた。

「状況が分からないようなので、これからあなたの過去を見せてもらいます」

「過去？そんなものをどうやって見るんだ」

すると閻魔は執務用の机から袋を取り出し、荘吉の前で中身を出した。それは手鏡のように見える。

「これは照らした者の生前の行いを映す？浄玻璃（じょうはり）の鏡？という道具、これで死の直前からのあなたを見ます。そうすれば何があったか分かるでしょう」

説明を聞いて彼は素直な意見を口にした。

「便利だが悪趣味な道具だ」

感想を聞いて映姫は語る。

「閻魔に求められるのは生前の行いを公平に見定め判決を下すことだけ、故にこのような道具が必要なのです。好き好んで死者の人生を見たりはしません。それこそ死者に対する侮辱ですからね」

それを聞いて荘吉は申し訳なさそうに言う。

「失礼した」

「気にしなくて結構です。では始めましょう」

映姫は手に持った鏡で荘吉を照らした。すると部屋の中は眩しい光に包まれ、天井に何かが映し出される。それは荘吉の最後の依頼となったあの出来事だ。

「…翔太郎」

最初に映ったのは彼の弟子『左　翔太郎』の姿だった。それを見て少し彼の表情は柔らかくなる。

そして再生される過去の映像は続き、とある場面で映姫は驚きの声をあげた。

「これは！」

驚く彼女が見たものは、銀色の髑髏の怪人だった。

その姿を見て映姫はかつて聞いた英雄の名前を口にしていた。

「…仮面ライダー！？」

――

「はあ…まったくどうしてあたいがこんな面倒ごとを担当しなくちゃいけないんだろうね」

三途の川の途中で小町は嘆いた。先ほどから彼女はああでもない、こうでもないと文句を吐きつづけている。そんな様子の彼女に荘吉は言う。

「それだけ上司から信用があるんだろ。悪いことじゃないと思うが」

「そうはいってもね旦那、あたいはどれだけ楽に仕事をやるかってことしか頭にないんだよ。それに優秀で仕事熱心な死神なんていくらでもいるんだし、わざわざさぼり魔なんか選ぶかね～」

ため息を吐き小町は、つい先ほどの映姫とのやり取りを思い出す。

●

「小町、しばらく死神の仕事を休みなさい」

映姫に呼ばれ執務室へと戻ると荘吉の姿はなく突然休暇を言い渡れた。

「マジですか！？いや～最近あたい働きすぎでしたしね。ありがたやありがたや」

それを聞いて小町はとりあえず喜んだがそれを遮るように映姫は続けた。

「話は終わっていませんよ」

「へ？」

一瞬固まった小町を無視して彼女は言った。

「そのかわりに中有の道の調査をしなさい。あそこでの騒ぎは聞いているでしょう」

中有の道での騒ぎ。それは二三日前から聞く、ある噂だった。

「一応は。確か化け物が出るってやつですよね」

「その通りです。それがどういうことか鳴海荘吉と共に調べてきてください。彼は生前探偵だったそうですから力になってくれるでしょう」

しかし小町は素直にその命令を承服できなかった。

というのもある規則があったからだ。

「ちょいと待って下さい。ここまで連れてきた死人を、また現世へ連れ出すのは禁止事項に当たるんじゃないんですか？」

一度彼岸まで来た魂を現世へと戻すことは原則禁止されていた。それは是非曲直庁に属する者であれば誰もが知っているルールだ。

「彼の場合は事情が違うのです。先ほど他の閻魔からも了承を得ましたし、何の問題もありません」

事情が違うとはどういうことかと思ったが、それよりも面倒くさい仕事を押し付けられたような気がして彼女は強い不満の声をあげた。

「ええ～！ほかに適任の奴がいるでしょう。なんであたいなんですか！」

しかし映姫はそれより強い口調で小町に命令した。

「つべこべ言わずにすぐ行きなさい！これは業務命令です！彼はもうあなたの舟で待っていますよ。それと、なるべく向こうでは騒ぎを起こさないように。あくまで頼むのは調査だけなのですから」

もうどうにもならないと小町は覇気のない声で上司に返事を返した。

「…はい、善処します」

それを聞いて映姫は彼女を見送った。

「よろしい。ではお願いしますよ小町」

●

まったくとんでもない災難だと彼女は思う。それに他の閻魔からの承認を得たという話も怪しい。あの短時間で、彼岸のルールを捻じ曲げるようなことを、了承させるだけの材料があったのかも疑問だ。だが命令である以上は従うほかない。もうどうにでもなれと小町は大きく溜息を吐いた。

「はあ～」

「何か考えがあるんだろう。あのかわいい閻魔様はなかなか切れ者のようだしな。それよりさっきの話の続きが聞きたい」

「ああ、愚痴ばっかりですまないね。聞いた話じゃ少し前から三途

の川の手前で奇妙な化け物が出るようになったらしいんだよ」

この世界には妖怪の類がいるというのを先ほど荘吉は聞いていた。おそらく幻想郷の住民は日常的に化け物を見て生活しているのだろう。だが噂の化け物は『奇妙な』と付け加えられている。つまりその怪物は幻想郷の妖怪ではない別の何かだと推測される。

「どんな姿か分かるか」

「あくまで聞いた話だけど、妖怪というには半端で人間にも見えないような奴らしいんだよ。しかも複数いるみたいでどことなく蜘蛛とか蝙蝠に似てたらしい。あとでかいトカゲの頭が歩き回ってたって話もあるね」

蜘蛛と蝙蝠…それを聞いて思い出したのはかつての相棒の最後と自身の罪だった。

「なかなかに興味深いな。他に何か聞いているか」

「なんかあったかな……ああ、関係なさそうな話だけど、黒装束の怪しい男達の噂もあるよ。なんでも小さい長方形の棒みたいなものを手に持って、ふらふら徘徊してたとか」

「そうか」

気になることが多いが後は調べてみてから考えるしかないだろう。そして気が付けば舟の前方に岸が見えていた。

「おっと、そろそろ到着だよ」

どうやら地獄まではまだ遠いらしい。
そんなことを思いつつ異界の探偵は死神と共に幻想郷へ降り立った。

#．４　『蘇えるＳ／地獄への行き方』　（後書き）

今回より仮面の探偵になります。仮面ライダーＷは見ていて非常に楽しいライダーでした。今年の映画にも出ていますし、これからも活躍はありそうで楽しみです。
そんなわけで次話に続きます。

#．４　『蘇えるＳ／鬼は酒癖が悪い』（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#．４　『蘇えるＳ／地獄への行き方』からの続きです。先にそちらを読むことをお勧めします。

#. 4　『蘇えるS／鬼は酒癖が悪い』

「どうだい旦那、そっちは何か分かったかい？」

中有の道、露天が並んだ通りを見ながら小町は聞いた。その横には団子と湯呑みが載った盆が置かれている。

船着場に到着した後、二人は別れそれぞれ今回の化け物の騒ぎについて情報を集めた。待ち合わせ場所は入り口ある茶屋で荘吉が向かうと小町がすでに来て茶を飲んでいた。

「これといって新しい情報はない」

やはりかと小町は思う。彼女も色々な人や死人から話を聞いたがとくに新しい情報は得られずにいた。大体の人々は噂を聞いただけで、実際の目撃者は多くはなかったのだ。

「お互い芳しくないね。どうしたもんだろう」

すると荘吉はため息を吐く小町の横に座り、だがと言葉を続けた。

「目撃者の話から推測できることがある」

「そいつは何だい」

「化け物が次に出現する場所だ。目撃者の証言を三日前から昨日まで順番に並べてみると移動しているのがわかる。最初に化け物が現われたのは中有の道の入り口付近、次の日は道の中間地点の露天がまばらな通り、そして昨日は彼岸行きの船着場の手前だ。順当に行くとすれば今日は…」

「まさか三途の川か彼岸かい？有り得ないよ。だってあそこは死神の舟以外は浮かない特別な川なんだから、いくら得体の知れない化け物でも泳いで渡れるとは到底思えないね」

「なるほど」

「ちなみに空を飛んで渡ろうとしても、侵入者を知らせる結界があるからすぐ警備担当の連中にばれて御用だよ」

説明の通りならあちらに渡るのは難しいと荘吉は思う。しかし結界という言葉に彼は何かを感じた。それは探偵としての勘だった。

「結界か。それはどういう仕組みなんだ」

「詳しいことは聞いてないけど特殊なタイプらしくて、解除するには分散配置された呪物をどうにかする必要があるって話だよ。場所は確か、道の入り口と出口とその間、あと三途の川の途中……って待った。もしかして化け物達は」

はっとして彼女は探偵を見た。彼は茶をすすりながら険しい表情のままだ。

「おそらくだがその結果は既に役に立たなくなっているかもしれん。それと目撃者の証言から推測すると最低でも化け物は五匹以上はいると見ていいだろう」

荘吉が聞いた限り奇妙な化け物の姿は五つに分けることができた。噂の三体の他は殻がついているものと長い鼻と牙を持つもので、似た動物や妖怪は見たことはないと目撃者は語った。

「最低五匹か。結界の件も調べてみる必要があるし一旦報告に戻るべきかね、これは」

「ふむ」

どうしたものかと二人が考えていると露天の道の先で悲鳴や慌てる声が聞こえてきた。

「おい！化け物だ、化け物！」

「飛んでくるぞ！」

「伏せろー！」

立ち上がり道に出ると、逃げ惑う人々を掻き分けるように向こうから走ってくる少女が見えた。一見すると女子高生のような格好のツインテールの少女は手に携帯電話らしきものを持っている。

「ひいー！誰でもいいから助けてほしいんだよ！」

叫びながら少女は走る。その後ろからは異形の白い怪物が低空飛行で彼女を追いかけていた。

それを見て荘吉は一つの答えを得る。それは愛しい街を泣かせる？悪魔（ガイアメモリ）の道具？がこの世界にも存在しているということだった。

「やはりドーパントか」

「なんだいそりゃ？知ってるようだけど」

「厄介な化け物だ。すまないが今は説明できない」

「どうしてだい旦那…って旦那！？」

生前彼は故郷？風都？で数々の依頼を受けていた。そして依頼の多くには人智を超えた怪物？ドーパント？の影があり、そのドーパントを生み出す道具が地球から抽出された記憶の断片？ガイアメモリ？だ。ＵＳＢメモリのような形状のそれは、使用した人間を怪物へと変化させ心までも蝕み、最終的に使用者を死に至らしめることもあった。そのガイアメモリが生み出す怪物がどうしてこの異世界に現われたかは分からない。だが荘吉は駆け出していた。

道の先から飛んでくるのはかつて相手をしたことのある蝙蝠タイプのドーパントのようだ。少女との距離はまだあるが、このままでは追いつかれるだろう。少女は半泣きの状態で必死に叫び逃げる。

「やっぱり家で念写しながら記事を書くほうが安全だったよ！文のバカー！！」

「お譲ちゃん！伏せろ！！」

「うん！？」

彼の声に少女は転がるように地面に倒れこんだ。

次の瞬間、勢いのまま荘吉はバット・ドーパントの頭部に飛び蹴りを浴びせた。

『ぐあッ！？』

突然の攻撃にバット・ドーパントは驚き地面に落ちる。その間に荘吉は少女を起こし後ろへと下がらせた。

「大丈夫か。下がっていろ」

「は、はい！」

少女が下がるのを確認してドーパントへ振り返ると、彼はスーツのポケットから赤と銀の機械のようなものを取り出し腹部に当てた。すると機械からベルトが排出され一瞬で腰に装着される。

「ふん、ここでもこれの世話になるとは因果なものだ」

それを見てドーパントはひどく落ち着かない様子で彼を見た。

『お前はまさか…！？』

だが荘吉は無言で懐から一本の黒いメモリを取り出した。メモリ表面には頭蓋骨を模ったSの文字が描かれており、下部にはスイッチが付いている。彼は空いている手で被っていた帽子を取り、そのスイッチを押した。

『スカル！』

すると男性の声が聞こえメモリが紫に発光した。そしてメモリを機械の赤い部分に差し込み、可動部を横へと倒すと先ほどと同じ声が響き黒い粒子のようなものが彼の周囲に現われた。

『スカル！』

「…変身」

その刹那、黒い粒子は荘吉を包み込み、一瞬で彼を異形の超人へと変えた。全体的に黒いボディーに白いマフラー、そして銀色の頭部は見るものに髑髏を連想させる形をしている。その様子に小町も

少女も驚きの声をあげた。

「旦那は一体…」

「これスクープだよね！うんうん！」

異形（スカル）の髑髏と化した荘吉は左手にある帽子を被りなおし、右手をドーパントに向け言い放つ。

「さあ、お前の罪を数えろ」

『――――――！！！』

ドーパントは甲高い咆哮をあげスカルに襲い掛かるが、どう攻撃してもカウンターで反撃された。

『くそ！！』

しばらくなりふりかまわず攻めたバット・ドーパントだったが、勝機が無いことを悟り上空へと逃げた。それを見てスカルは胸部に右手をかざした。

「逃がさん」

すると胸部アーマーにある肋骨状のパーツが開き、大型の銃が一瞬でかざした手の中に出現した。そしてベルトからメモリを引き抜き銃に装填すると空へ狙いを定める。

『スカル！マキシマムドライブ！』

「終わりだ」

引き金を引くと無数のエネルギー弾が上空のターゲットに向かっていった。それらは全てバット・ドーパントに命中し、白い怪物は地面に落ちた。

「やった！」

「すごいね、これは」

落ちた怪物へスカルが歩み寄ると体内からガイアメモリが排出された。

しかし排出されたメモリを見て彼は驚く。彼が知る限りドーパントのメモリは骨のような外観をしているのだが、目の前のメモリは自身のメモリと同じ形をしていたのだ。

「どういうことだ？」

スカルは落ちたメモリを調べようとしたがそれは黒く変色しあっという間に砕けてしまった。不審に思いつつドーパントに目を向けると、そこに倒れていたのは黒い格好の人物だった。

「これは忍者か？」

その人物は絵に描いたような忍者の格好をしていたが、気を失っているようでまったく動く気配は無い。

「噂にあった黒装束の連中じゃないかね、そいつは」

振り返れば小町と先ほどの少女が駆け寄ってきていた。

「さっきは助けてもらってありがとう、私は新聞記者の『姫海堂（ひめかいどう）はたて』。ちょっと話を聞きたいんだよ！」

感謝と自己紹介を済ますとはたてはスカルに取材を申し込んだ。
「生憎だがそういうのはＮＧだ。とくに今はな」
だがスカルは天狗の記者に背を向けた。
「え～取材拒否！はたんはショックなんだよ！」
「アホ、周りを見てごらん」
「うん？」

小町に言われはたてが周囲を見回すと、三人を取り囲むようにふらふらと四人の人影が現われた。その四人は倒れている忍者と同じ格好で、手には先ほどと同じガイアメモリが握られている。そして彼らは次々とメモリを起動させた。

『マンモス！』
『アンモナイト！』
『トリロバイト！』
『スパイダー！』
「あ～あ囲まれちまった。どうしようね、旦那」
「やつらに聞いてみるか？」
「なんで余裕なの！ヤバいんだよ！」
周囲を囲む怪物を見てスカルは思い出す。かつて幼馴染が見せた

ドーパントのデータの中に似た姿のものがあった事を。それらのメモリは制御が難しく、試作段階で排除されたようで風都では一度も見かけなかった。

そしてこの危機的状況にあっても荘吉は安堵を感じていた。その理由はスパイダー・ドーパントだ。かつて倒したメモリの使用者は彼が最も信頼していた相棒であった。その心の闇に気づけず、戦う事を悩み、結果的に街を泣かせことが彼の罪であり後悔だ。荘吉は心の中でただつぶやく、

――――――――お前じゃなくてよかった――――――――

と。

「不味いね。なんとかなんないかな？」

「無理だな」

「だから！なんで余裕っぽいのかな！ピンチなんだよ！ピンチ！！」

迫るドーパントの群れに三人がどう対処すべきか考えていると、近くの露天にある飲み屋から声がした。

「やれやれ、せっかく飲みに来てるってのにうるさいもんだね」

「いいじゃないか。でも度が過ぎるのはいただけないよな」

そこから出てきたのは見るからに酔っ払っている小柄な少女と背の高い女性の二人で頭には角が生えていた。

「おい！あれ見ろよ！仮面ライダーだぜ。ついでにショッカーの改

造人間みたいのもいる！」

スカルと怪物を見て一本角の女性は懐かしそうに少女に言った。しかし二本角の少女は何か納得できないような表情をしている。

「似てるけどもっとシンプルっつうか、古いっつうか…てか帽子被ってるし、違うよ～。それに改造人間はもっと弱そうだし」

「そうだったかな」

『星熊勇儀（ほしぐまゆうぎ）』は少し考えてから左腕を後ろに引き右腕を斜め前に傾けドーパントを見た。

「ん～違ったか？まあ、いいか。おーし！かかってこい！」

そのポーズはかつての戦友がよく戦いの際に取っていたものだった。

「じゃあこっちは2号！」

『伊吹萃香（いぶきすいか）』はそれに応じるように両手を握り拳にし、別のポーズを取り勇儀に並んだ。

二人の酔った戦鬼は遠くなった過去を思い出す。

そこには戦いがあり、かつての巫女があり、そして異世界の友があった。

#．４　『蘇えるＳ／鬼は酒癖が悪い』（後書き）

仮面の探偵の二回目になります。なんか書いてるうちに頭がこんがらがってきたりして時間がかかってしまいました。次はなるべく早く書きたいです。
それでは次話に続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0237z/

Seven Fantasia 異聞東方戦記

2011年12月23日02時51分発行